

---

# たった今、現代医学が敗北しました

回収屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たつた今、現代医学が敗北しました

### 【Nコード】

N7298X

### 【作者名】

回収屋

### 【あらすじ】

Wii版バイオハザードのギャグパロです。各キャラの人間性はオリジナルとは異なり、完全に崩壊しております。御読みになられる際は正装（もしくは全裸）で御読みてください。より一層御楽しみいただけます。

## 序章

ラクーン市警に所属している特殊部隊・通称『S・T・A・R・S』<sup>①</sup>

ブラヴォーチームを乗せた捜索用ヘリが消息を絶つ

その事実が同市警のスポークスマンによって明らかになった

ラクーン市警の発表によると、昨夜、S・T・A・R・Sの同チームは遭難者が相次ぐアークレイ山地・ラクーンフォレストの現地調査に出動した

が、本日未明の通信を最後に……連絡が途絶えたこの事

同市警では何らかのトラブルに巻き込まれた可能性が高いとして、目撃者の証言を求めるとともに、今夕にもS・T・A・R・S・アルファチームを捜索に投入する方針となった

ラクーン郊外では近年、猟奇殺人事件が多発し話題になっていたが、今回の事件で一層住民の不安を招くことになった

連絡が途絶えたS・T・A・R・S・ブラヴォーチームの捜索に赴いたクリス等隊員達は、怪犬の群れに襲われ、洋館に逃げ込む

だがそこは……幾多のモンスターを生み出し、事件の原因を作った恐怖の研究所をカモフラージュするための館だった

館に閉じ込められた S・T・A・R・S・メンバーのクリ  
スとジル達は、脱出口を求めて彷徨ううちに、事件の真相を知ることとなる……

本作品には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれます。

本作品に登場する人物・団体・クリチャー等は実在のモノとは異なります。

本作品に使用される挿絵はプライバシー保護のため加工されています。

尚、作品内容を声に出して読む事はおすすめしません。御両親が泣きます。

墜ちないへりは、ただのへりだ

私の名は『アルバート・ウエスカー』。特殊部隊『S・T・A・R・S』のリーダー。実年齢よりずっと若く見えると、近所の奥様方からよく言われるナイスガイだ。チャームポイントは金髪のオイルバックと、愛用の黒のサングラス。今、私は非常に困惑している。何故なら……さっきまで私達が乗っていたへりが墜落し、目の前で派手に炎上しているからだ。運良く我々は大したケガもなく大破したへりから脱出できたのだが、これに関しては完全に予定外だった。当初の予定としては、私がへりに施した細工で突然の故障に見せかけ、山中に不時着させる手筈だった。が、神様のイタズラというか……悪魔の慈善事業というか……私の部下の一人、つまり、S・T・A・R・S・メンバーの一人が飛行中のへりの中で、いきなりオートマチックを発砲しやがったのだ。放たれた9ミリ弾はコントロールパネルに命中し、へりは完全に制御不能。なんとか当初の目的ポイント付近には降りられたが、危うく全滅するところだった。で、今からこの事態を引き起こした張本人に発砲した理由を聴こうと思う。

「おい、ジル……」

パアアアアアアア

ン！

「うわおッ!？」

その人物の名を呼びながら肩に手を置いたら、振り向きざまに撃つてきやがった。私は華麗にブリッジして回避したが、一体、何のもりだ!？

「ああ、なんだ……ウエスカーか」

その女はそう言って辺りをしきりにキョロキョロしている。完全に落ち着きを失ったその様子から、よほどの事がへりの中で起きた



山中で野郎の尻を狙撃する敵国ってナニ？

「静かにしろ、クリス。まずは周辺に散乱した装備と物資を回収するんだ。その後、ここから北東2キロの地点にある洋館へと向かうぞッ！」

「わ、分かった。すぐに準備する！ おく、ヒリヒリしやがるううう……」

そう言っつて自分の尻の状態をなんとか鏡で見ようと、体をひねつてマヌケにクネクネしている男

『クリス・レッドフィールド』 25歳。血液型・O型。身長181センチ。体重80.5キロ。チームで？1の射撃技術を持つ実力者。元空軍パイロットで、アルファチームのヘリ操縦も務める。観察力、洞察力に優れ、実戦経験も豊富。臆する事を知らぬ精神力と、鋼の肉体を兼ね備えているが……

「げッ！ ウエスカー、マジでヤバイ！ さっきの狙撃でオレの尻が割れちまった！」

「……………クリス、尻はみんな割れている」

「な、何だっつてエエエ！？ それじゃあ、みんなも既に尻を狙撃されたっつてワケか！？」

彼に悪気は無い。単に知能が他の人より極めて残念なだけなんだ。そう……………彼には悪気も罪も無いのだ。

「ちよつと、ウエスカー」

「何だ、ジル？」

「ここから北東2キロに洋館があるって……………どうしてそんなコトまで分かるのよ？」

しまった。私としたことが、ストーリーを進める事に気を取られて、とんだ失言をしてしまった。このままでは、この私が実はこの事件の黒幕の一人であるコトがバレてしまう。何とか騙し通さねばならない。そして、私はひらめいた。

「私のサングラスは特注だ。不可能は無い」

「なるほど。さすがだわ、ウエスカー」

自分で言うのもなんだが、今の適当過ぎる切り返して納得すんなよ。この女、クリスに負けず劣らずのバカかもしれない。

(……………ん?)

急いで装備と物資を掻き集めていると、大木の陰に隠れるようにして立ち尽くしているオッサンを発見。私は一応声をかけてやる。

「おい、バリー。そこで何をしている？ もうすぐ出発するぞ」

オッサンは私に声をかけられ、一瞬、ビクッと全身を震わせた。で、何者かから狙われている被害者みたいに、辺りをキョロキョロと憔悴した面持ちで見渡している。

「お、俺は行かないッ。冗談じゃない……夜中にこんな山中を進むなんて、マツ DXの前でパンツを脱ぐようなもんだッ！」

例えの意味はよく分からないが、彼は完全に怯えきっていた。

『バリー・バートン』 38歳。血液型・A型。身長186センチ。体重89・3キロ。元SWAT。火器関係の知識が豊富で、隊内での火器の整備・補充を担当。モイラとポリーという二人の娘がおり、家族を大切にしている。けれど……

バサバサバサバサッ

！

「ふぎやああああああああああああああああああああああ  
ツツツ……」

バリー、絶叫。

「落ち着け！ 野鳥が羽ばたいたただけだ！」

オッサンは極度のビビリだった。カッと両目を見開き、口をアングリと全開にし、その場に力無くへたれこむ始末だ。

「よし、全員出発するぞ！」

真夜中の行進が始まった。これから先、我々の身にどのような怪現象や敵やトラップが待ち受けているか……私だけが知っている。

さつきも言った通り、私は黒幕の一人。今回はS・T・A・R・S・のメンバーを使って、アンブレラ社が開発したB・O・W・(生物兵器)と一定の環境下で戦わせ、その実戦データを記録するのが主な目的だ。そこから得られたデータはB・O・W・の更なる性能向



上につながり、アンブレラ社は“次なる段階”へと発展できるだろう。

『アンブレラ社』 アメリカでの家庭用薬品シェア90%を誇る、全米?1の巨大複合企業であり、その裏の姿は、細菌兵器や生物兵器を開発する死の商人。

今回は、アンブレラ社が管轄する地下研究施設の一つに事故が発生し、施設及び、偽装のために建てられた洋館までもがウイルスに汚染された。で、アンブレラの上層部から私に指示が下ったワケだが……私には上層部の思惑とは別に目的がある。研究施設の最深部に保管されている、オリジナルの『T-ウィルス』を首尾良く奪取し、アンブレラのライバル企業への手土産とするのだ。今回得られるであろう貴重な実戦データとともに。

(ただ、問題は……)

私は隊列の先頭に立ち、チラツと後ろを振り返る。

「なあ、ジル。署内の連中がオレのこと見ながら、“ゴリラだゴリラ”って指差して言うんだけどさあ、どうしてだ？」

「脳筋でマツチヨで、デスクの引き出しに常にバナナを常備してるからよ」

バナナ片手に歩くクリス。おい……拳銃はどうした？

ロケラン担いで歩くジル。おい……いきなりソレはねえよ。

「やっぱ危ねえよ、ウエスカー！ 蚊に刺されてかゆくなったトコをかいて、そこからバイ菌が入ったり、野犬の遠吠えでビツクリしてシヨック死するかもしれんツ！ なあ、引き返して救援を待とうツ！」

文句ばつかたれるバリー。おい……娘の写真を握り締めて泣くな。

(まあ、いい。洋館に着きさえすればどうにでもなる)

そう思いながら我々は行進を続ける。

私はアルバート・ウエスカー。

果たして、何人が明日の朝日を浴びられるだろうか。あるいは

## こういうヤツは大抵、次のシーンで死ぬ

やあ、みんな。私の名はアルバート・ウエスカー。前回のエピソードを読んでくれた人達は知っていると思うが、私は今、数名の部下を引き連れて真夜中の山中を行進している最中だ。クリス、ジルバリー……三名とも非常に有能な部下で、どれだけ有能なのかRP G風に説明すると、ラスボスの魔王相手に竹やり装備して突っ込んでいく勇者ぐらい有能である。

「なあ、ウエスカー……今、獣の唸り声みたいなのが聞こえなかったか？」

私の隣でショットガンを構え、しきりに周囲を警戒している男が小声で呼びかけてきた。彼の名は『ジヨセフ・フロスト』 27歳。血液型・B型。身長179センチ。体重72.3キロ。チームの整備技師。危険物取扱いなどの資格を持ち、車軸整備を担当。血の気が多く暴走気味な性格で、緊急時の行動には不安がある。ちなみに……もうすぐ死ぬ予定。何故なら、さつきから死亡フラグの乱立が止まらないから。B級ホラー映画で最初に死ぬ名も無い出演者と同様の空気をもし出しているし。銃を構えて周囲を警戒する仕草が全体的に小物っぽい。こういう輩は、見ている人達に最初のインパクトを与えるためだけに大概が犠牲になる。本人は悪くないが、犠牲になる。

<ん？ 何だ？ 何かいるのか？> <武器を構えてオロオロ  
> <な、何だ……気のせいかな……> <うわあああああああああああッ！！>

レギュラーキャラになれないヤツは、上記のような単純な流れで事務作業のごとく片付けられる。悲しいが、それが自然の摂理であり、それがゲームのプロデューサーの意向である。



ゾンビ犬が草むらの中から跳びかかってきて、倒れているジョセフの腕や脚に食らいついていった。

(……………んん?)

ウエスカーが小さく首を傾げる。何だか……様子がおかしい。食らいついてはいるが、ジョセフからは特に出血している様子も、肉を食い干切られている様子もつかげない。まるで、与えられたオモチャと戯れているみたいだ。

「わんわんおツ、久しぶりの獲物だおツ！ ゆっくり遊んでいくんだおツ」

ゾンビ犬なのに、妙に無邪気な笑顔だ。肉体の所々が腐敗し、片目なんか飛び出しちゃってるのもいるんだが、連中は教育番組のアニメキャラみたいな声でしゃべって、とっても楽しそうにじゃれている。

「ジョセフ！ 今、助けてあげるわツ！」

「待て、撃つんじゃない！ あれだけ密着した状態ではジョセフにも当たってしまう！」

オートマチックを構えて今にも引き金を引きそうになっていたジルを制し、私は冷静に観察することにした。

(おかしい……ヤツ等はもっと凶暴で、人など容易に噛み殺してしまっただろ……もしかして、野生化して何だかの突然変異でも起こしたのか!?)

キラ〜〜ン

考えのまとまったウエスカーのサングラスが煌めく。

キラ〜〜ン

ジルが手にするオートマチックの銃口が、月明かりに照らされて一緒に煌めく。つまり

パアアアアアアアア

ン！

撃ちやがった。銃弾は群がるゾンビ犬に……



てまともに歩けそうもない……」

ジョセフの表情がとつても微妙。ゾンビ犬に食い殺されそうな光景にみまわれながら、結局、味方から尻を銃撃されてリタイヤ。

「安心しろ、ジョセフ。後で救助隊のへりに連絡しておく。ボラノール持参で急げとな」

私はそう言つてサングラスを不敵に光らせた。

「ああ、軟膏タイプで……よ、よろしく……ぐふッ……」  
ジョセフ、果てる。

「おい、バリー！　いつまで木陰に隠れている。走るぞッ！」

少し離れた所で、大木の陰から顔面を半分だけのぞかせてこつちをうかがうバリー……仲間を助ける気はハナっから無し。

「すまん、ウエスカー……俺もここでリタイヤだ」

バリーの額が大量の脂汗で濡れている。そして、股間も濡れている。

「ま、まさか……40前のオッサンがか！？」

バリー、家で帰りを待つ妻と二人の愛娘に何て言う気だ？　病気もケガも無かったが、失禁はしてしまった……そう告白する気なのか？

（まさか、ここまでヘタレだったとは……私の考えが甘かった）

私は気まずい気持ちを胸にしまいながら、ゆっくりと踵を返した。さようなら、バリー。オマエも立派なメンバーだった。

パンツ！

「うわおッ！？」

バリー、木陰から跳び出す。いきなりジルに発砲されたから。

「全速力で走れよ。早く乾くかもよ」

このアマ、すべからず暴力で解決しようとしやがる。

と、いうワケで、私達はささやかな月明かりを全身に浴びながら、呼吸を荒げ、鬱蒼とした山中を駆け抜けていく。そして、数分後……到着した。

「こ、コレが……その洋館なのか？」

クリスが呆けた声で建物を見上げる。

「何か……禍々しい空気が漏れているわ」

目を細めて警戒するシル。

(さて、諸君。ここからが本番だ。しっかりと戦闘データを記録させてもらおうぞ)

口元をわずかに歪めて微笑む私、ウエスカー。生か死か この館の中で待ち受けているのは

「……………あ、ホントに乾いてる」

バリー、空気読め。



## 金持ちの屋敷Ⅱ デカイ・不気味・ダレもない

ギギギイイイイイイイイイイイイ………

正面玄関の大きな扉が、静寂に軋む音をたたせてゆっくりと開いた。

「これは……見事な豪邸だなあ！」

私はわざと驚いてみせた。この洋館は、地下に建設されている実験場を隠すための大がかりなフェイク。そして、今から私のカワイイ部下達が死闘を演じる巨大な迷宮となるのだ。

「ちよつとオオオ〜、ダレかいるウウウ〜!？」

ジルが呼びかけてみた。不法侵入したにも関わらず、全く人が出てくる気配が無い上、物音一つしない。やたらと広い玄関ホールに四人の生存者。まさにホラーの王道的スタートだ。

「よし、まずは全員の装備と持ち物をチェックだ」

そう言っただけはクリス・ジル・バリーの三名と目を合わせる。この巨大な館の中には性能をある程度調節しておいたB・O・Wが、各ポイントに配置されている。全く武器を持っていない状態で館の中をウロつかれても、適切な戦闘データの回収はできない。部下達がどんな装備や道具を準備しているのか、上司である私がしっかりと把握しておかねば。で……

数分後

「……………おい」

私は床の上に片膝を落とし、“考える人”のポーズをとっていた。床の上に陳列した持ち物一式に対する、私なりの最大のリアクションである。では、簡単に紹介しよう。

クリスⅡバナナ(黄色)、バナナ(黄緑)、バナナ(腐りかけ)、バナナ(ヌイグルミ)

「クリス、支給された拳銃はどうしたんだ？」

「すまん、家に忘れた」

「で、オマエのバツクパツク……何故、バナナだらけなんだ？」

「おいおい、ウエスカー。知ってるだろう？ オレが一定時間ごとに新鮮なバナナを摂取しないと、命にかかわる発作が起きるのを」

「いや、初耳だ」

「そうか。なら、今から説明を」

「いや、結構だ」

私はクリスの発言権をサラツと無視して、自分のホルスターから予備の拳銃を抜いた。

「コレを使え」

そう言っただけで私がクリスに手渡したのは、『ベレッタM92FS』。9ミリパラベラム弾が装填されたオートマチックの拳銃だ。そして、次……

ジルⅡケータイ、コスメポーチ、自爆スイッチ(乙)、自爆スイッチ(甲)

「ジル、さっきオマエがクリスとジョセフの尻を撃った拳銃はどうした？」

「ここに来る途中で捨てたわ」

「……………は？」

「だって、むさい野郎二人を撃った銃なんかもう使いたくないし」  
「じゃあ、最初っから撃つんじゃねえよ。」

「で、どうしてケータイが？ 無線機を持つてるだろう」

「やだッ、ウエスカーったら知らないのオ？ 今はケータイで登録しておくだけで生理日予測ができるのよ、ルナ ナで」

何の心配してやがる。

「後……………『自爆スイッチ』ってサインペンで書かれている、こ

の縄跳びの持つ手みたいな装置は何だ？」

「ええつとねえ〜、(乙)を押すとクリスのヌイグルミが爆発して、(甲)を押すとウェスカーのサングラスが爆発するわ」

「あッ、危ねえエエエエエエエ　　ッ!!」

私はお気に入りのサングラスを思いっきり投げ捨てる。

「クリス、何してるッ!?　早くその珍妙なヌイグルミから離れるッ!」

私はかなり焦り気味で警告する。

「ダメだ……オレにはできない」

「……………は？」

「このヌイグルミは誕生日に妹からもらったプレゼントなんだ……毎晩抱き枕として一緒に寝ているんだッ!」

クリス、エピソード的にはイイ話なんだが、使用用途が圧倒的に気持ち悪い。

「あひゃひゃひゃひゃッ!　うそうそつ、そんなの嘘よッ!　やっだもつ、本気にしちゃってさあ!」

腹を抱えて笑うジル。このアマ……ラクーン市警に戻ったら絶対減給してやる。

「仕方ない、オマエにはコレを渡しておく」

そう言っただけはサングラスをかけ直しながら、『コンバットナイフ(M9)』をジルに貸してやった。アメリカ軍に正式採用されている、自動小銃に装着できる銃剣だ。そして、最後に……

バリー!!コルトパイソン、娘達の写真、遺書、紙オムツ(大人用)

「一応、強力な武器を持ってきているのはいい。娘の写真も別に構わん。で……オマエは遺書とオムツをセットで持ち歩いているのか?」

私はもうなんか、真面目に質問する気力が失せはじめていた。

「そ、そりゃそうだろ……常に危険と隣り合わせな仕事だからな。いきなりさつきみたいなの野犬に襲われて、心臓麻痺なんか起こした

時のためだ」

バリーのハートはガラスどころか豆腐でできているようだ。

「で、この紙オムツなんだが………どうにかならんのか？」

「ま、まさかッ、使うなって言うのかッ!？」

バリー、本気でたじろぐ。どんだけ股間の括約筋が緩いんだよ。

「使うなどは言わんが、正直……オマエには恥や外聞を気にする余裕は無いのか？」

「あつてたまるか!!！」

何で仁王立ちで威張るんだよ。

「まあ、いい。予備の弾薬なら私が少し持っているし、四人でかたまつて行動すれば何とかなるだろう」

私はサングラスを中指でクイツと直し、部下達に一瞥をくれた。

「で、これからどうするワケ？ あたし達の任務はブラヴオーチームの搜索………だけど、夜間の山中はさつきみたいな野犬の群れが現れて危険よ」

ジルが私のことをキツと睨みつけながら言った。

「ああ、その通りだ。山中での搜索は明日の昼間に変更する。そして、今からこの館の中を隅々まで探索する」

「どうしてだ？」

クリスがマヌケな面で問う。バナナの皮をむきながら。

「もしかすると、ブラヴオーチームのメンバーが我々と同様にこの館にたどり着き、中を彷徨っているのかもしれない」

「な、なるほど………可能性はあるな」

バリーが頷く。紙オムツをはきながら。

「じゃあ、どうする？ この玄関ホールからいくつか扉が見えてるけど、ドコから行ってみる？」

ジル、やる気を出してくれるのはかまわんが、ケータイでモバゲーにアクセスするんじゃない。

「よし、まずは左に見えるデカイ扉の部屋からだ。いいか、今のところ人の気配は無いが、どんなアクシデントに見舞われるか分から

ん。各自、決して気を緩めるなッ！」

私は檄を飛ばしてやる。

「おおッ！」

「了解したわッ！」

「た~~~~か~~~~の~~~~つ~~~~め~~~~！」

おい、変なのが混じってるぞ。おそらく、家で娘達と観た深夜アニメに影響されただろうが、ここはあえて無視。

ガチャ

その大きな扉に鍵はかかっておらず、すんなりと開いた。

「へえ~~~~、どうやら食堂みたいね。人は……いないようね」

最初に入ったジルが周囲を警戒しながら小声で呟く。

カッチ、カッチ、カッチ……

年代物の柱時計が静寂の中で時を刻んでいる。

「だが、ドコかに人がいるのは確かだな。暖炉に火がついている」

バリーの言う通り、瀟洒な造りの暖炉の中で炎が燃え盛っている。

「気味が悪いなア……さっきまで生活していた住人が、煙のように

消えちまったみたいだぜ……」

クリスが中央の大きなテーブルの表面を指でなぞり、ポツリと呟いた。その広い食堂は2階まで吹き抜けになっており、古めかしい内装だが丈夫な材質で建てられているせいか、破損や劣化の様子は見て取れない。

「おい、コイツを見てみる……」

私はそう言って暖炉の前の床を指差した。そこにはおびただしい量の血が水溜りを作っていて、暖炉の炎に照らされてより一層の不気味さを漂わせている。

「おいおい、マジかよ……！」

クリスが思わず息を呑んだ。

「どうやら、“アクシデント” っるのがもう登場したみたいね」  
ジルがナイフの柄を力強く握る。

「や、ヤバイ……は、吐きそう……！」

バリー、よそでやれ。

(さて、頑張ってもらおうぞ 諸君)

私はこの後の展開に期待し、思わず口元を歪めるのだった。

死体を見つけたら、食べる前に通報してください

「よし、まずは二手に別れる。ジルとバリーでこの食堂をしばらく調査してくれ。私とクリスはこの扉から出て近辺を調べてみる」

そう言って私は、食堂に入って来たのとは別の小さいドアを指差した。

「いいの？ さっきは四人でかたまっただけで行動した方がイイみたいな事言っただけだ」

ジルが少々心配そうに言う。

「心配ない。そう遠くにはいかない。搜索に時間がかかる場合、玄関ホールを中心になるべく安全地帯を確保して、一帯を拠点にした方が効率的だ」

「分かったわ。じゃあ、頼んだわよ。クリス」

「おお、任せておけ」

バタンツ

ドアが音をたてて閉まる。私とクリスは横に伸びた細長い廊下に出た。左か右か……私は当然、この洋館の内部構造を把握しているため、ドコに何の部屋があり、どんなトラップやB・O・Wが配置されているか知っている。

「よし、まずは左に向かおう」

私はそう言ってクリスに先に行くよう手で合図する。左に行った先は、さっきの食堂で食事をした者達がコーヒーや紅茶を楽しむ『ティールーム』になっている。が、現状は……

（さて、クリス……まずはオマエの緊急対応能力を試させてもらう）私はサングラスを中指でクイツとやりながら、自分の拳銃に手をかけた。

グチャ、グチャ、グチャ……………グシュウウウ

「な、何だ……？」

肉の塊を攪拌するような生々しい音がして、クリスの歩く足が止まる。

「お、おい……アンタ、ここの住人か？」

人がいた。クリスの方に背中を向けて、床に両膝をついて何かしている。妙だ……赤黒い染みで所々が汚れ、ボロボロに擦り切れた服。こんな豪勢な館に住む住人の姿とはとても思えないし、床一面に広がる液体は

「ま、マジかよッ　　！？」

おびただしい量の血だまりには一体の人間が倒れており、その人間の体にはいくつも食い千切られた痕が。

「なんてことだ……アレは、ケネスじゃないか！」

私は銃を片手に握りながら知らなかったフリを演じる。

『ケネス・J・サリバン』　45歳。血液型・O型。身長188センチ。体重96.8キロ。化学兵器に対する対策・防護専門。偵察、陣地確保といった危険を伴う任務につく。無口でチーム最年長、チームでは唯一の黒人系男性。彼は今　死んでいる。ダレがどうみても死んでいる。首の肉を食い破られているのだから。

「貴様、動くんじゃない！」

いきなりの惨状を目にしたクリスが、さつき渡したベレッタを手に

<うううううう……あアアアア……>

“ソレ”は乾いた呻き声を漏らしながらゆっくりと立ち上がった。そして、クリス達の方を振り向いたその顔は、どう見てもまともな状況にある人間の面ではなかった。髪の毛はほとんど抜け落ち、皮膚は青白く変色して所々が腐敗している。口元にはケネスのモノと思われる血がベットリとこびりついていた。

「どうした、クリス！？　こいつはどう見てもバケモノだ！　早く



撃て！」

「だ、ダメだッ……弾が出ない！」

「落ち着け、クリス！ オマエが構えているのはバナナだッ！ 十分に熟したバナナだッ！」

「し、しまった、緊張のあまり……オレとしたことが！」

ムキムキ……ムキムキ……

「これでよし」

「よし”じゃねえッ！ 皮をむいてる場合じゃないだろうがッ！」

モグモグ……モグモグ……

「食うなよッ！」

「し、しまった……オレの脳が制御しきれず……つい」

クリスの人生は脊髄反射の積み重ねのようだ。つまり、魚や昆虫と同じ部類。人類失格、バンザイ。

（こいつはヒドイ……ここはひとまず大食堂に退却だな）

戦闘データを記録するタイミングを失った私は、クリスの襟首を掴んで引っ張っていく。

バタンッ！

「ちょ……どうしたの、二人とも！？」

食いかけのバナナを喉につまらせながら引きずられてきたクリスと、慌てる私の姿を見たジルがおののく。

「き、気をつける！ この先にとんでもないバケモノがいた！ ケネスが食い殺されていたんだ！」

私はいつもより更に真剣な声で警告してやった。いきなり予定が狂ったが、こうなれば仕方がない。この大食堂にもうすぐ踏み込んでくるであろうさっきのバケモノ……ヤツにどう対応するか、ジルとバリーの分のデータも同時に記録するでしょう。

「ま、待てよッ、ウエスカー……“バケモノ”って一体、何のゴトだよ！？」

柱時計を調べていたバリーがコルトをホルスターから抜いた。☐

コルトパイソン』。高威力のマグナム銃で、357マグナム弾仕様のリボルバー式。

「確信は無いが、アレは……おそらく『ゾンビ』ってヤツだ」

『ゾンビ』 正確には“活性死者”と呼ばれる、T-ウイルスに感染した人間の初期段階。ウイルスによる遺伝子変質で新陳代謝が活発化しており、強靱な力や、銃で撃たれても死なない体力を持つに至るが、同時に細胞の壊死サイクルも早くなるため、外見は所々が腐り落ちた死体のようになっていく。ウイルスにより前頭葉が破壊されるため、思考力はほとんど無く、代謝の増大に伴う激しいエネルギー消費から常に強い飢餓感を抱え、食欲を満たそうと食物を求めるだけの存在。感染前の習慣、記憶は多少残っているが、思考能力を失っているため、行動は自分に関わりのある場所を徘徊したり、ドアの開閉を行う事のみにとどまる。

「ゾンビですって？ モーダー、アナタ疲れてるのよ。ゾンビなんて架空のモンスターが現実存在するはずがないじゃない」

スリー……いや、ジルが半分呆れた感じで言う。

「い、いや、マジだって！ オレもケネスが食われてるとこ見たし！」

クリス、慌てながら次のバナナの皮をむくんじやない。

ギイイイイイイイイ……………

ノブが回り、小さなドアがゆっくりと開く。そして、半開きになったその隙間から “ソレ” は又ツとその威容を現した。

「ほんぎゃああああああああああああああああああああああ

あ ツツツ！！」

バリー、大・絶・叫。と、同時にジルが

「せいやッ！！」

パンツ！

ドアめがけて跳び蹴り。当然、大食堂の中に入りかけていたソイツは、ドアと壁の間に思いつ切り挟まれるワケで。

<ああアアアアアア　　うちツ！！>

ゾンビが痛がつとる。

<いきなり何しはりますのオ〜くん！　わてが食事中に後ろでバタバタ騒がしいから、こうして様子見に來ただけですよ〜！！>

しかも、流暢にしゃべってる。

「クリス、コイツがそうなの？」

「あ、ああ……ソイツに間違いない」

「ふ〜くん、見た目は確かにグロいわね。けど、ホラーメイクか何かじゃないの？」

ジルはグイグイと脚に力をこめながら、目を細めてゾンビの方を睨みつけている。

<おツ、よ〜〜見たらキレイなネーチャンがおるやないけツ！　どうや？　わてと一緒に腐乱ス料理でも食わへんか？>

ダジャレまで飛び出す始末だ。

（一体、どうなっているんだ……外のゾンビ犬といい、このゾンビといい……T・ウィルスが想定外の方向に進化したのか？）

私は少々考え込んでしまいそうになったが、ここは一先ず撃退しなくては。

パンツパンツパンツ　　！！

ベレッタを構えて連射。ゾンビの頭部に全て命中する。

<あうツ、あうツ、イタタタッ！　何すんねん、このグラサンオヤジがツ！　そんな危ないモン撃つてきはったら、わて死んでしまっがなツ……………って、あ、わてもう死んどるわ>

おかしい。胴体ならともかく、頭部にあれだけ9ミリ弾を食らってまだ倒れないとは。

「コイツならどう!？」

ザクツ

コンバットナイフをドア越しに突き立てるジル。その刃先はゾンのデリケートゾーンにヒット。

<おおおおおお  
うちッ!!　そ、それはあきまへんわあ〜>…人間はやめても男は廃業したくありまへんでえ〜>…

ドサッ

倒れた。股間を両手で押さえながら。

「さすがだぜ、ジル!」

クリスが親指立てて笑顔。

「見たかッ!　署内で“泌尿器スレイヤー”と陰口叩かれるあたしの実力ッ!」

ジルが中指おっ立てて笑顔を返す。おい……一体、署内で何やってやる。

(どうにもおかしい……イヤな予感がしてきた)

私の頬を不吉な汗が伝う。このまま館の探索を続行してもいいものなのか?　B・O・W・達のこの変貌ぶり……計画に多大な支障をきたすのでは?　だが、もう後には引けない。私は自分の仕事を全うし、必ず成果をあげてみせる!

「う……う……う……ボ、ボッシュート、です……」

失神したバリーが後ろの方で意味不明にうめいていた。

## 鉢植えの植物を引っっこ抜くという発想

「これは……………ヒドイわね」

ジルが片手を自分の口元にあてがいがら呟いた。彼女の目の前には、首を食い破られて果てたケネスの遺体が横たわっており、恐怖にひきつって両目をカッと見開いたままになっている。実に無念な最期をとげたようだ。

「狂ってやがる……………ゾンビか何か知らんが、人間を食い殺すなんて正気の沙汰じゃねえよ」

そう言っただけでケネスはケネスの遺体の傍でしゃがみこみ、遺体の状態を観察する。

「クリス、何か他に変わった所はあるか？」

ズリズリ……………ズリズリ……………

私は気絶したままのバリーを引きずりながら、クリスに問う。

「……………ん？ 何か手に持ってるぞ」

クリスがケネスの手に握られていた物体を発見する。ソレは

『フィルム』だった。おそらく、この館の中を撮影したものだだろう。再生するための設備があれば、中身を確認してチームメンバーの捜索に役立つかもしれない。

「よし、フィルムは私が預かるぞ。全員、先に進むぞ」

私はケネスの猟奇死体が視界に入らぬよう、バリーに目隠しをしてやってから、彼の頬をペチペチと叩いて起こしてやる。

「バリー、しっかりしろ。探索を続けるぞ、立てるか？」

「……………んんッ、う……………う……………ん？」

バリーが目を覚ます。オハヨウ、役立たず。

「うわああああああッッッ！ ま、真っ暗だアアアアア！  
ついにこの世が終焉を迎えてしまったアアアアア……………げ

ふッ

バリーが再度失神する。オヤスミ、役立たず。

「仕方ない。バリーのメンタル面が回復するまで、ここに寝かせておくでしょう」

そう言つて私は気絶したバリーを優しく寝かせてやった。ケネスの死骸の隣に……。

バタンツ

ティールーム真横にあるドアを開くと、薄暗い廊下に出た。

「ん？ 何よ……コレ？」

廊下を行った先には階段が見えており、その手前に少し開けた空間があつて、小さな棚のような家具の上に鳥カゴが乗っていた。

「真つ黒な羽が幾つも落ちてるな……カラスでも飼つてたのか？」

クリスが辺りに散乱している羽を指でつまみ上げ、渋い表情になつている。鳥カゴでカラスを飼う。もし、事実なら、この洋館の住人はどうしようもなくイカレている。だからなのか……さっきのようにやたらとハイテンションな死体もどきが居るのは。

「クリス、ジル、その鉢植えに生えている緑色の植物を調べてみる」

私はそう言つて、階段のすぐ脇に並んでいた二つの鉢植えを指差した。ソレは『グリーンハーブ』。アークレイ山中に自生している特殊な植物だ。どう特殊なのか、私の口から説明したいところだが、そうしてしまうと「何故、そんな効果まで詳しく知っている？ ま、まさかッ!？」。つてなコトになりかねない。だから、ここはクリスとジルの両名にそれとなく使用用途を教えてやらねばならない。いくら特殊部隊の精鋭達とはいえ、この洋館の制圧だけでも無傷で済むワケはないのだから。

「何よ、ただの観葉植物じゃない」

「そうだな。特に変わったトコは無いな」

二人とも全く関心は無し。まあ、それが普通のリアクションだ。

グロテスクなバケモノが出没するような館に生えている植物を使つて、体力やケガの回復を図ろうなんて発想……その人間の良識を疑いかねない。

「まあ、待て待て。これ見よがしに並べてあるという事は、何か意味があるはずだ」

私は疑惑が持たれないよう、自分のバックパックからおもむろに携帯端末（PDA）を取り出して操作した。

「多分、コレだな。うん、間違いない」

「一体、何なのよ？」

「コレを見てみる」

私はジルにPDAを手渡した。モニターにはアークレイ山中とその近辺に自生する、珍しい植物の一覧が映っている。

「ええつと〜……『グリーンハーブ』？ 使用することで体力を少々回復できます。他のハーブと組み合わせることにより、別の効果を発揮する場合も」

ジルはモニターを見つめながら、鉢植えからグリーンハーブを摘んだ。

「ふ〜ん……で、どうやって使うんだ？ やっぱ“ハーブ”って言うくらいだから、お茶にいれたりして飲むのか？」

クリスが小さく首を傾げた。そう……実のところ、そこが一番の問題なのである。私としても、このハーブの使用法には多少の疑問点を抱えているのだ。

ハーブの正しい使用方法（例）

？ 煎じて飲む（専用の道具一式が必要になってしまう）

？ 豪快に生食い（確実に消化不良を起こす）

？ 潰して汁を傷口に塗る（一番現実的だが、塗ってすぐ傷口が治癒したらソイツこそバケモノ）

？ 嗅ぐ（ダメージ受ける度に葉っぱの臭いをクンクンしてる画が、ヤバイ中毒患者に見えてしまう）

？ 目に入れる（単に痛いだけ）

「各自で好きに使え」

私は迷ったあげく、放任主義をきめこんだ。

「よし、それじゃあ行くか」

ハープを分け合い、目の前の階段を上り始める。

ギシギシ……

「アン アン」

ギシギシ……

「アン アン」

ジル、妙な擬音を呟くんじやない。発想が完全にオツサンだ。

バタンツ

階段を上った先にはドアがあつて、開けると壁に小さな松明がある廊下に出た。ドアのすぐ右には別の通路が続いており、そちらの通路の突き当たりの所に大きな鏡があつて、その鏡に

「出やがったなツ！」

クリスが身構える。鏡に映る少々小太りの動く死体。ゆっくりと歩を進め、こつちへ向かっている様子が分かった。

パンツ！

クリス、発砲。

パライイイイイ ン！

割れる鏡。

「ぬツ、しまった！ 残像かツ！？」

残像どころか別の物体に向かって撃ってるし。オマエは鏡の機能に戸惑う小学生か？

<いらっしやあ〜い！ 久しぶりのエモノ、三名様ご案内やでえ〜！>

またしても妙に元気な歩く死体。クリスめがけて楽しそうに襲ってきたやつだ。

「近づくんじやねえツ！」



ボゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ツツツツ！！

クリス、殴った。素手で。

<うつひよおおおおおおおツ！ 胴体さんサイナラあゝゝ！>  
ゾンビの頭部が見事にブツ飛ぶ。

「やるわね、クリス。ゴリラパワーはやっぱ伊達じゃないわ」

ジルが微笑みながら親指立てたりしているが、クリス……頼むから普通に銃を使ってくれ。まともな戦闘データがとれん。

「ここはクリアだ。隣の通路から進もう」

今度は私が先頭になって、左右の壁に沢山の細長い槍が立てかけられた廊下に行く。壁に設置された小さな松明の灯りが反射して、なんとも不気味に煌めいている。そして、その通路の途中で、一体の小さな石像を発見。石像は『黄金の矢』を携えている。

「ジル、その矢を回収するんだ」

「は？ ……どうしてよ？」

確かに不自然な指示だ。不法侵入した上、人の家の高価そうなオブリジェを持っていくこうとしている。行為自体はコソドロのソレと変わらない。が、各ポイントに設置されている様々なアイテムを回収し正しく使っていないと、このミッションそのものはおろか、館の制圧すら不可能なのだ。精密な戦闘データを正しく記録するため、ドコに何を設置してどんな仕掛けを作動させるか……どんなタイミングでどんな資料等を発見させるか……全て緻密に計算し配置したおかげでカナリの自腹を切った（ドンキで小道具買ったりして）。有給休暇もほとんど使い果たした（私は毎日何をやっているのだから……そう思いながら）。そんな私の地道な努力を、いきなり徒労に終わらせるワケにはいかない。

「証拠物件の押収だ。この館で我々のメンバーの一人が殺されていたんだ。裁判で有利になるに越したことはない」

「なるほど、さすがはウエスカー。抜け目が無いわね」

ジル……騙す私が言うのもなんだが、オマエは簡単に納得し過ぎ。  
「よし、次はこっちのドアから行くぞ」

我々から見て正面と右側にドアがあり、私は右側のドアを警戒し  
つつ開ける。同じ頃

「う、うゝん……あ、あれッ……皆、ドコだッ？」

テイルルームで置き去りにされていたバリーが、気絶から目を覚  
ました。周囲を見渡しても仲間の姿は確認できず、代わりに……ケ  
ネスの変わり果てた姿がすぐ隣でコンニチハ。

「……………死いゝねゝばゝイイのに 死ねばイイのにッ

ドコかゝ遠いゝトゝコゝ口で」

ついにバリーが壊れた。珍妙な歌を口ずさみながら、大食堂の方  
にヨタヨタと歩いて行ってしまった。

親方あゝ、空から女の子（石像）が！

我々は広めのスペースに出た。どうやらここは、吹き抜けになっている大食堂の2階部分のようだ。1階の大食堂を上からグルッと取り囲むようにして、狭い廊下のみがあつて特に目立つ障害は

<うううう……あああ……>

いや、あつた。少し離れた所にゾンビが一体徘徊しているのが確認できる。

「よし、これはチャンスだ。これだけ離れていれば、安全に銃で倒せるハズだ。クリス、今度こそ頼んだぞ」

「おおツ、やってやるぜツ！」

勇ましくベレッタを構えたクリスに対し、我々に気づいたゾンビがゆっくりと迫つて来た。

パンツパンツパンツ　！

9ミリ弾が三発命中するが、ゾンビの歩みは止まらない。

「くそツ、こつちに来るんじゃねえツ！」

更に顔面にも二発命中させたが、まだ怯む様子は無く、どんどんクリスとの距離を縮めて前につんのめるようにして覆い被さつてきた。

<捕まえたでえ……このクソガキ……！人の家に何しに来よつたんや？　はっはあ……野郎二人に若い女が一人。このスケベ共がツ！　よそ様の家で盛つちゃいけませんって、お母ちゃんから習わんかつたんかツ！？>

いきなりゾンビから説教された。

「ワケ分かんねえコト言つてんじゃ……ねえよツ！」

マズイ。体勢が整つてない状態でガツチリと組みつかれたため、上手く引きはがせない。このまま力任せで引きはがそうとすれば、ゾンビの鋭利で不潔な爪で裂かれるかもしれない。どうすれば

！？

「クリス！ 真横の柵に何かあるぞ！ ソイツを使え！」

私は苦戦するクリスに大声で教えてやった。

「んツ？ お……コイツは……！」

左の壁に造られた簡易柵から、キラツとシャンデリアの光が反射してきた。その光は柵に置かれた一本のダガーナイフからのものだった。『ダガーナイフ』。ゾンビの噛み付きや即死系のつかみ攻撃を受けた時に使用できる、ディフェンスアイテム。

「これで ツ、どうだツ！！！」

グサツ！

ダガーナイフを掴み取ったクリスが、ゾンビの側頭部めがけて勢い良く突き立てた。

くちつくしょオオオオオオ

ツツツ！ この世のリア充

全員爆発しいやアアアアアア

ツツツ！>

ドサツ……

恨み言を吐きながら倒れた。

「全く……ここはとんでもない館ね。こんなのがまだ他にもいるのかしら？」

ジルが倒れたゾンビを足のつま先でツンツンしながら呟く。

「分からん……だが、普通の状況でないのは確かだ。ここから先も油断できん」

そう言っつて私は二人を先導し、廊下を半周回ったところで立ち止まった。我々の前に一体の石像が佇んでいる。女性をかたどったスリムな石像だ。

「ジル、この石像……何か怪しくないか？」

私はここぞとばかりに彼女の観察眼を試すことにした。実はこの石像の中にアイテムの一種が埋め込まれており、外からは確認できないのだが、叩き壊すことによってそのアイテムを回収できる仕組みになっているのだ。

「ええ、確かに怪しいわ。この胸……きつと豊胸手術済みね」

石像が美容整形してどうする。



(なんてこった……まさか、俺って置き去りにされたのか？ 待てよッ……あるいは、他の三人が何者かに連れ去られたという可能性も!?)

ウロウロ……ウロウロ……

様々なマイナス思考が脳内を彷徨い始め、彼自身も大食堂内を意味無くウロつきだす。そして、壁際に置かれていたアンティークの壺の中を片目でのぞき、「お〜い、もし中に居たら返事してくれえ〜!」なんて言い出す始末。もはや、末期症状が出ている。そんな時……

ゴトツ

(えッ……何だ……?)

何か重量のあるモノが動いたような音が自分の頭上の方からして、思わず仰ぎ見た。

「マジですか？」

我が家で待つ妻よ、娘達よ……生命保険の加入を断られた父さんを許してくれ。あと、皆の事はもちろん愛して

ズゴンッ!!

残念ながら走馬灯は途中退出し、バリーの頭上にデカイ石像が降ってきて 命中。

ドサッ……

俯けに倒れ伏すバリー。そして、上の方から聞こえてくる声。

「おい、今……何かにぶつかったような音がしなかったか？」

クリスが不安を覚えて下の方をのぞき見た。

「げッ、バリーが倒れてるじゃない!」

一緒に下をのぞいたジルが指差して言う。

「おいッ、バリー！ 大丈夫かッ！？ 動けるかッ！？」

私は大声で呼びかけてやったのだが、彼は割れた額からドクドクと大流血してて、小さな呻き声を上げるだけでまともに反応していない。

「これって……オレのせいなのか？」

「確かに石像落としたのはクリスだけど、やれって命令したのはウエスカーよね」

二人の鋭い視線が私を射抜く。この空気はもしかや “責任のなすり合い” か？

「だが、よく見てみる。割れてバラバラになった石像を」

私はそう言ってる一点を指差した。そこには燭台の灯りをキラキラと反射させる、一個の物体が見てとれる。それは 『青い宝石』。

「わア〜お でっかいダイヤが落ちてんじゃん！ 早速、証拠物件の押収といきましょうよ！」

ジルが手の平を合わせて大歓喜。彼女の瞳には“物欲降臨”の文字が。

「慌てるな。アレを拾いに行くのはまだ早い。少しの間そのまま放置しておくんだ」

「ええッ、何でよッ！？」

ジルがあらん限りの力を込めて私につかみかかってくる。オマエ……自分が警察であるという自覚あるか？

「きつと、非常に高価なモノに違いない。あのままにしておけば、この館の住人か、あるいはこの異常な状況を生み出した犯人が出てくるかもしれない」

「なるほど……さすがね、ウエスカー。やっぱりあたし達とは頭のキレが違うわ」

またしても適当な思いつきを述べてしまったが、部下達は納得したようだ。コイツ等、なんて純真無垢なハートを持っているんだ……バカだけだ。で、上の方で我々が騒がしくしている間、下の

方では

は、はやく……た、助け……ろ……よ……

ガクッ……

最後の力を振り絞り、床に血文字を書き残したバリーが果てた。



**墓場の死体も復活するのなら、刺身も動き出すのかな？**

「よし、次はこつちだ」

我々は業務上過失致傷で動かなくなつたバリーをさりげなく見捨て、玄関ホールの上階に続く大きな扉を開く。

「なあ、ウエスカー……オレ達って結構この館の中歩いてるけどさあ、一向に住人らしき人達に会ってないんだが」

「何が言いたいんだ、クリス？」

私は足を止めて彼の懸念に満ちた顔を睥睨する。

「もしかしてよお、あの“ゾンビ”ってヤツが“住人”だったんじゃないか？」

コイツ、なかなか良い勘をしている。野生の勘とでも言うのだから、そこいらのゴリラとはワケが違うようだ。バナナは欠かさず食ってるけど。

「確かに……可能性としてはありうるな」

私は軽く頷きながら玄関ホールの中央階段にある、墓石の絵が描かれたドアを開いた。

「外に出た……？ いいえ、違うわね」

ジルが月の見えない夜空を一瞬だけ仰ぎ見てコンバットナイフを抜いた。

「ここって……もしかして墓場か？」

外に出たのは確かだったが、周囲には頑丈そうな鉄柵が張り巡らされており、苔生した石畳が広がっている。一面に見えるのはダレのモノとも分からない沢山の墓石。風雨にさらされてすっかり汚れており、欠けたり傾いて倒れそうになっているモノもある。

「行ってみよう。館の敷地から安全に出るための脱出経路が確保できるかもしれん」

私はそう言つて目の前の石の階段を下り始めた。

「こりゃあああああッッッ！ 死者の眠りを妨げるヤツ等に

は、わてが死人代表として天誅を加えるんやでえ〜！ 手の甲をキユツとつねつたりして痛くしたるう〜！>

さすがは墓場。当然のようにゾンビが居て、こっちに向かって来た。

「うるせーよ、こっちこそ痛くしてやるぜツ！ ゴリラ代表としてなッ！」

クリス、ついに自分で認めやがった。  
スタンツ

少し助走を加え、石畳を軽いステップで蹴り、闇夜にクリスのガチムチボディが舞った。

ドゴオオオオオオオオオオオオ

ツ！！

<あべしいいいいいいい〜！?>

クリスの豪快なドロップキックを食らい、ゾンビがボロ雑巾のように吹き飛ぶ。

「クリス……頼むから銃を使ってくれ。危なっかしくて仕方が無い」「すまねえ、ウエスカー。外の空気に触れた途端、オレの中で何かよく分からない……そう、“本能的なモノ”が暴れ出したんだッ！」

マズイ。クリスが明らかに野生に目覚めかけている。これはあくまでB・O・Wとの戦闘データを記録するのが趣旨であり、クリスのゴリラ化観察日記ではない。

（まあ、いい。近い内に肉弾戦ではどうしようもない相手も出るしな）

私は頭の中で今後の展開を整理しながら、クリスとジルを引き連れて雑草が生い茂った墓地の中を突き進み、少し行った所でピタッと足を止めた。

「ジル、こいつを見ろ」

そうやって私は一つの墓石を指差した。その墓石には天使の絵が彫られており、天使の持つ弓矢の矢じり部分にくぼみがあった。

「『弓矢』……………はっ、もしかして！」  
ハツとしたジルが館の中で回収した『黄金の矢』をバツクバツクから取り出す。さすがだな、ジル。中々の洞察力だ。その矢の矢じりを外してだな

ブスリッ！

「……………おい、ものすごく痛いんだが……………」

何を思ったのか、目の前のクソアマは私の脳天に矢を突き刺しやがった。もちろん、血が出る。ピュ〜〜ってなってる。ピュ〜〜って。

「えッ、違った？ 矢でダレかをやっちまえば、天使が降りてくるっていう流れじゃないの？」

平然と言つてのけやがった。“ダレか”って……………オマエ、全く迷うことなく私に突き立てたよな？ なんか私の事嫌ってる？ プライヴェートとかで気に入らない事でもした？

「い、いいか……………この矢の矢じりを外して、墓石にあるくぼみにはめ込むんだ。そうすると……………」

ゴゴゴゴゴゴオオオオオ

墓石が重厚な音をたたせながらスライドし、そこに地下へと続く階段が現れた。

「す、すげえ……………よくこんな仕掛けが解ったなあ、ウェスカー！」  
理科の化学実験している小学生みたいに、私の後ろでクリスが驚いている。

「地下室の開閉にこんな仕掛けを施すなんて、この下はカナリ怪しいわね」

ジルが息を呑んだ。

「ああ、その通りだ。油断するなよッ」

我々はチラチラと揺れている淡い灯りが差してくる地下へと下りる。そこは墓場と同様に石畳になっており、壁も天井も大きさがまばらなレンガや石で造られていた。

カタカタカタ……カタカタカタ……

天井から吊り下がった大きな鎖が動き、滑車や歯車が回っているような音が響いている。何かを作動させるための造りなのだろうか？ 壁には暖炉のようなモノがあつて、その中の炎が周囲を不気味に照らし出していた。

「一体……何なのよ、コレって？」

「イヤな寒気がしだしたぜ……ブラヴオーチームの連中、無事だといいいんだが」

ジルとクリスの懸念はもつともだった。むやみにデカイ洋館だけならまだしも、こんな目的不明な地下室を墓地の下に造るようなヤツが館に居るとすれば、明らかに尋常な精神の持ち主ではない。

「二人とも、アレを見てみる」

私が地下室の端っこ辺りを指差して言う。そこには円形状のテーブルみたいな石碑があつて、その表面にあるくぼみに一冊の『本』がはまつた。

「コレって……“呪いの書”って書いてあるわよ」

ジルが思わず眉をひそめた。

「何かの手がかりになるかしれん。回収しておこう」

そう言つて私はその本を手に取り、何気なく裏表紙を見てみた。

「ジル、こんなモノがあつたぞ」

本の裏には簡単な造りの金具が付いており、そこに1本の鍵がはまつていたのだ。もちろん、この仕掛けも私の美的感覚が生み出した細工である。

「もしかすると、館の中で使えるのかしら？」

「かもしれん。こんな所に隠してあつたくらいだ。きっと、入られるはマズイ部屋の鍵に違いない」

「なるほど。つまり、30代独身男性の汚部屋とか、メイド喫茶の

休憩室とかがあるワケね」

ジル、言いたい事はよく分からんし、オマエ……何か変なバイトとかしてないだろうな。

「お〜い、こっち来てくれ！ 妙なモン見つけたぜ！」

別の箇所を調査していたクリスが何かを発見してこっちに手を振っている。そこには

「うげえ〜……趣味悪う〜……」

ジルが毒づく。壁に埋め込まれるようにして作られた石像が四つ。横並びになって佇んでいる。それは『仮面』で、目・鼻・口に穴があいていた。

「ふむ……おそらく、今手に入れたこの本に書かれているメッセージ。コレのことだろう」

本にはこう記されている。

四つの仮面、すなわち、『口無き仮面』・『鼻無き仮面』・『目無き仮面』・『三つ全て無き仮面』、全ての仮面が揃う時、災いは再び蘇る

「災いが蘇るって……何て不吉なんだよ。オレって結構迷信深い方なんだ。こんなトコ、早くオサラバしたいぜ」

クリスが急にソワソワし始める。だが、実際のところ、この石仮面や本に靈的な由縁などない。これもまた、隊員達の観察力や分析力を試すギミックの一つに過ぎない。

「ウエスカー、あたし気づいちゃったわ」

ジルが独り言のように呟いた。

（おおッ、ついに事の真相に勘付いてくれたかッ！？）

私はサングラスを中指でクイツとやりながら、彼女の方に向き直った。

「ここに並ぶ四つの石で出来た仮面に、それぞれ該当した仮面を装着させることによって……新しい仮面が姿を現すのよッ！」

「な、何だよ、新しい仮面って!？」

「……………『家無き仮面』」

「ま、マジかアアアアアアアアアア!？」

フフフツと微笑むジルと、完全に信じ込んだクリス。二人とも、ここはアメリカだ。安達 実はいない。ダメだ……この二人には何も期待してはいけないような気がしてきた。

「うっ……うっ……あ……？」

お、俺はダレだ？ ああ、そうだ……俺はバリーだ。で、ここはドコだ？ ああ、そうだ……山中の謎の洋館だ。そう、俺は仲間にはついたらかきにされた上、頭上に鈍器を落下させられ、一時的に行動不能になっていたんだ。そして、またしても仲間の姿は見えず、静寂が支配する大きな食堂の中で一人ぼっち。

（勘弁してくれよ……！ メチャメチャ心細いよ……！）

バリーのウサギ並に脆弱な心臓がバクバクいつてるし、少々ヨロめきつつ辺りを徘徊し始める姿からは、特殊部隊の精鋭という社会的立場など微塵も感じられない。哀れ過ぎて全米？1の涙を誘いそうだ。

「よ……し、こうなったら行ってやる……」

男38歳、巨大な洋館内部を一人で搜索。彼にとってはカナリ重大なザ・決断と言えるだろう。

バタンッ！

バリーは小さい方のドアから食堂を出て、ティールームを通過（ケネスの遺体が視界に入らないよう慎重に）し、カラスの羽が散乱する鳥カゴ近くの階段を上る。そして、正面に見えるドアを開けて更にまっすぐ行った所のドアまでたどりついた。つまり、ウエスカー達とは別のルートだ。

バタンッ！

「……………何だよ、コレって？」

ドアから入ったすぐ右隣に大きな西洋甲冑が飾られており、銀色の盾をかかっている。そして、その盾には文字が刻まれていた。

死は全ての始まり

(や、やめろよオ〜)……不吉なコト書くんじゃねえよ……)

バリーは自分の背中にイヤな汗が伝うのを感じて、思わずコルトに手をかけた。

「お、恐れるな、俺！ この愛銃がある限り、どんなバケモンが出てきても一発で退治してやる！」

彼はそう自分に言い聞かせて、前に見える階段を駆け上がった。階段の先にはU字になった狭い廊下があつて、その廊下には……

(何だ？ 線路か?)

明らかに何かが移動するための細長い線路が敷かれている。その線路をたどっていくと、床の上に四角の石板みたいなモノが設置されていて、石板の表面には1本の『鍵』がセットされていた。だが、その石板にも文字が刻まれており……

紋章を奪う者に死の喜びを

……とある。

(またかよ。もっと楽しそうなコト書けよな…… “この館の主人はスケベという理由で死んだ”とか)

バリーの望む楽しさの基準がよく分からない。彼はその鍵をとりあえず無視し、廊下の先に行く。突き当たりには、さっき見かけた西洋甲冑と同じモノが飾られていて、同様に銀の盾をかかっているで、またしても盾に文字が刻まれており……

死こそ全て

「全くよオ〜)……ここの住人はどんだけ死が好きなんだよツ！ それともアレか？ あの鍵を奪うと神の怒りに触れて罰せられるって寸法なのかツ!？」

恐ろしい言葉で混乱するバリーだったが、わざわざこんな箇所を館の中に造って設置してある鍵だ。何か重要な役割を果たすモノに





な音がだんだんと大きくなっている。

「あ、そうかつ」

カチャ……

バリーは何か気づいて持ってた鍵を元の位置に設置し直した。  
すると。

ズズズズズズズズ……

石板がせり上がり、移動した左右の壁が元の位置に戻り、退路を塞いでいた甲冑は突き当たりに後退し、彼を斬殺しようとしていた甲冑も後退して静止した。

「……………」

バリー、九死に一生を得る。彼は数十秒間の沈黙の後

(おお〜、神よ……俺にまだ生きるとおっしゃるのですね)

床にへたれこみながら、とつても幸せそうな表情でもう一度天を仰いだ。ズボンの股の間をビッチャビッチャにして。

「やっぱりダレもいやしねえ……」

玄関ホールまで戻ってきたバリーが周囲を見渡すが、仲間の姿は無かった。このままこの安全地帯で待機する方が精神衛生上は好ましいのだが、万が一、ウエスカー達に見捨てられた場合、ほぼ百パー孤独死する自信があった。だから、ここは少しでも行動範囲を広げ、仲間達と出会う可能性を高めた方が安全にこの洋館から脱出できるはず。そういう考えに至ったバリーは

バタンッ！

食堂とは反対方向の部屋の扉を開き、勇気を振り絞って中へと入って行く。

「ここは……………画廊か何かか？」

中央には肩に壺を抱えた女神像が鎮座しており、周囲の壁には大小様々な油絵が飾られた薄暗い部屋だ。そして、入ってきた扉の向かい側には、別の部屋へとつながる通路と小さなドアの二つが見える。



しっかりと握りしめて励まし、電気ショックで心臓マッサージ。

「は、はうううう　　ッッッ!」

上半身をビクンツと震わせ、バリー……またしても九死に一生を得る。

<どや?　もう平気か?>

心配そうに見つめてくるゾンビ。

「ああ、すまない……君は命のお　　」

パアアアアアアアアアア

ン!!

ゾンビ、頭部炸裂。大量の肉片がバリーの顔面にへばり付く。

「おい、バリー!　無事か!?」

大声とともにベレッタを構えたクリスが駆け寄ってきた。その後ろにはウエスカーとジルの姿も。

「俺、次の日曜に必ず教会へ行く。神様に祈ろうと思うんだ……外見は醜くても心は清いんだって……」

バリーが力無く呟いた。

## ダーウィンさん、進化論が否定されました

「す、すまない……まだ体がまともに動きそうにないんだ。俺はしばらくここで休憩して後から追いかけるよ」

「そうか、仕方ないな」

我々は精神的に著しく疲弊しているバリーを残し、探索を続行することにした。

「バリー、コレを」

そう言っただけでバリーがケータイとコスメポーチを手渡す。

「コレは……？」

「回復に時間がかかるようならモバゲーにアクセスしてちょうだい。イイ暇潰しになるわ。でも、ルナ ナにはアクセスしちゃダメよ。セクハラで訴えるわよ」

悪戯っぽく微笑んでみせるジル。

「ジル……オマエってヤツは。ありがとう、ありがたく受け取っておくよ」

仲間との大切な絆に思わず涙腺が緩みそうになる。

「で、ポーチの中には鼻毛切りバサミが入ってるから、またゾンビに襲撃されたら喉でも突いて自害してちょうだい」

今度はマジ気味に微笑んでみせる。

「ジル……オマエってヤツは。俺、必ず回復して自分の鼻毛を全部切ってから返すよ。もちろん、洗わずに」

仲間との大切な絆を心の中でポイツと捨てちゃう。

「よし、先を急ぐぞ」

ウエスカーが先導して先程の画廊に戻る。実はこの部屋、中央の壺を肩に抱えた女性像に『洋館1階の地図』が隠されている。が、地図は壺の中に入れており、周囲からは壺からはみ出た紙切れが見えているが……。

「クリス、あんな所に入っているくらいだ。なにか重要なモノに違

いない。なんとかして取れないか？」

私はクリスの現場観察能力を試すことにした。この部屋には隅っこに動かせる簡易棚があり、それを像の近くまで押していつて、棚に乗って地図を入手する……それがベストな方法なのだが。

「くツ、さすがに高くてジャンプしたくらいじゃ届かないぜ」

初めはダレでもそうする。問題はここからなのだ。言い換えれば、天井から吊り下げたバナナをチンパンジーがどうやって上手く取るのか。その智能テストに近い。踏み台を使ったり、長い棒で叩いてみたり。

「おい、ウエスカー！ この不自然に置かれた棚……動くぜ！」

よし、クリス。気づいてくれたか。まずは第一段階合格だ。だが、棚を使用するということさえ気がつけば、後は自然と使い方は限られて

ガシャアアアアアアアアアアア

ツツツン！！

「よっしゃ、取れたッ！」

嬉々として地図を拾うクリス。コイツ……棚を持ち上げて壺めがけて投げつけやがった。思考が短絡的とかいうレベルじゃない。チンパンジーの実験を並行して隣合わせでやったとしたら、チンパンジーがクリスを見て「えッ、ちょ、マジでWWW」とかなりかねない光景だ。クリス、人類としてのポードーラインを下回る気なのか？（オマエ……どうして特殊部隊なんかに入隊できたんだ？）

正直、疑問ではあるが。とりあえず地図は手に入った。

ガチャ

「解錠できたわ、行きましよう」

ジルが墓地の地下室で発見した鍵を使って、開かなかったドアを開けた。その先はL字になった廊下が続いており、右側の壁には断続的に窓があつて、時々鳴り響いている雷の閃光がチェス盤のような模様の床を照らしている。

「いかにも何かが出てきそうな雰囲気じゃねえか……！」

「ああ、そうだな……特に窓の方には気をつける。どんな襲撃を受けるか分からん」

「後ろはあたしが警戒するわ」

クリスが窓の方を、私は前方を、ジルが後方へと視線を向けてゆつくりと進む。ホラーにありがちな展開としては、稲妻の閃光とともに窓ガラスが割れて

バリーイイイイイイイイイイ

ツツツ

！！

「うおッ、な……何事だッ!?!」

続けざまに二枚の窓ガラスが派手に砕け散り、そして

「わんわんおオオオオオ……!!」

稲妻の閃光を纏って、それぞれの窓から一体ずつゾンビ犬が飛び込んできやがった。

「くそッ、挟み撃ちかよッ！」

クリスが慌ててベレッタを構えたが、照準を合わせるよりも早く連中は駆け寄ってきて、彼の腕にガツチリと噛みついた。

「ボクの名前は『太郎』、栄えあるゾンビ犬一族の優秀な戦士なんだおッ！」

噛みつきながら自己紹介してくれた。そして、もう一匹の方は

「くッ……ちよつと！ 離しなさいよッ！」

ジルの脚にこれまたガツチリと噛みついちゃってる。

「ボクの名前は『次郎』、兄の太郎とともに一族の幹部を目指す若きエースなんだおッ！」

どうやら兄弟のようだ。ゾンビ犬社会の事情とかは知ったことではないが、コイツ等は山中で襲ってきた連中よりずっと攻撃的で、

強い。

「クリス！ ジル！ なんとか振りほどけッ！」

ゾンビ犬が飛び込んでくる事態も私の想定内。この不意打ちをどう乗り切るのか……さあ、二人とも見せてもらおう。

ガブリッ！

「い、痛いんだお〜！ こんな反撃は考えてなかったお！」

「どほはッ、はひっははッ（どうだ、まいったか）！」

見たままをコメントしよう……クリスがゾンビ犬に噛みついていて。背中にガッチリと。

（もうよすんだ、クリス！ 両親が見たら号泣するような光景だぞ！）

正直、直視できるレベルではない。人としての尊厳とは、これ程までに簡単に崩壊するものなのか？ あるいは彼が特別なのか？

「で、ジル…… オマエはどうなってるんだ？」

「え？ 別に。特に不自由はないけど」

太ももに噛みつかれたまま、彼女は事も無し気に言う。

「いや、その〜…… 痛くはないのか？」

「うん、まあ、程良く痛いけど。無理に引きはがすのも面倒だし」

面倒？ 晩御飯の献立を決めるような軽いノリで言うなよ。犬一

匹が太ももからブラ下がって、『ジル+ゾンビ犬』で別の生物兵器が出来上がってるよ。

「な、何だおッ……！ ボクの体が急に痺れて……きた……おッ」

ジルに噛みついていた次郎が、突然、ポトリと床の上に落ちた。

四本の脚をピクピクさせ、口からアワを吹き始める。

「何事だおッ！？ 弟よ、しっかりするんだおッ！」

太郎がクリスへの攻撃をやめ、倒れた弟のもとに駆け寄ってその体をペロペロと舐めてやる と。

「は、はうッ な……何が、起きた……んだ……お？ ボクの……

……体が……けふッ」

パタッ



兄の方も床の上に倒れ伏してしまった。

「おッ、何かよく分かんがオレ達の勝利みたいだな。所詮はイヌところ。人間様に太刀打ちできつかよ！」

ケンカに勝ったクソガキみたいにはしゃぐクリス。

「……ちよつと、アンタ等どうかしたの？」

ジルの方はどうも釈然としないので、仲良く寄り添って痙攣している二匹に声をかけてみる。

「ぼ、ボク達の体が……新種のウイルスに……お、侵された……おチ~~~~ン……」

太郎・次郎、戦死。

「ジル、オマエ一体……!?!」

私は思わず身構えた。次郎はジルに噛みついて急変し、その次郎と接触した太郎が同様に急変して倒れた。もしや、既にジルはT・ウィルスに感染していて、彼女の体内でウイルスが突然変異を起こし、B・O・W・ですら昏倒させるような毒素を有したモノとなったのか？ 生物学上の可能性としてはありうるが、まさか……。

「ジル、体に妙な違和感とかは？」

肩に手をポンツと置いてきたクリスが、ジルを真剣な目つきで見つめる。

「平気よ、別に何とも無いわ」

強がってみせるジルだったが、隠そうとする焦燥感がわずかに顔色を変えている。

「そうか。けど、辛くなったら真っ先にオレ達仲間を頼れよ」

「クリス……ええ、そうさせてもらうわ」

ジルが照れ臭そうに呟く。

「ウエスカー……一応、オレなりに考えてみたんだが」

「ほう、何だ？」

「さっきのイヌところ、“新種のウイルス”に侵されたって言うてやがった。それはつまり――」

野生丸出しの勘が、この事件の裏側に潜むT・ウイルスの存在を

感知したのか！？

「ジル、オマエの病名は『ビッチ』。残念だが……現代医学ではどうしようもない」

ビシッとクリスが指差して断言。カッと光った稻妻の閃光をバツクに背負いながら。

「そ、そんなああああああああああああああああああああああ

ツツツ！？」

ムンクの叫びみたいに溶けるジル。

「……………」

私はそんな小芝居を無視して瞑想し、文字通り犬死にした二匹のゾンビ犬をとむらってやった。迷わず天国へ逝けますよ〜に。

鉄骨が足りないから耐震偽装!? 違う、エコだ!

「よし、クリアだ」

我々はゾンビ犬からの襲撃を受けた廊下を突っ切り、突き当たりのドアを開けて別の廊下に出た。そして、正面に見える部屋のドアを開けて中に入る。

「ここは……ふむ、浴室のようだな」

少々薄汚れた感じの床と壁。洗面台には小物が散乱し、光沢を失った鏡が私の姿をボンヤリと映し出している。

「うわッ、汚いわねえ……バスタブの中に泥水みたいなのが溜まってるわ」

ジルが壁際に設置されたバスタブの中をのぞきながら顔をしかめる。

「う〜ん、トイレの方は特に変わった所は無いな。消臭力のイイ匂いがするし」

クリスが隅っこの洋式便器を眺めて言う。消臭剤に関しては、私の後から設置した心ばかりの演出だ。ちなみに、ラベンダーの香りだ。

「ジル、そのバスタブの水を抜いてみる」

私が彼女に指示を出す。そう、このバスタブの底には汚水に隠れて見えないが、一本の『古びたカギ』が落ちているのだ。そのカギでないと開けられないドアがこの浴室の近くにある。

「この汚いやつを? 何でよ?」

その疑問は最もだ。

「ジル、よく考えてみる。この館の状況は明らかに尋常ではない。このまま仲間の探索を続けるのなら、わずかな手掛かりも見逃せない。もしかしたら、仲間の一人が我々のようにここに来て、何か落としていったかもしれない。要はしらみつぶしだ」

「なるほど……ええ、分かったわ」

ズゴゴゴゴゴオオオオ

バスタブの脇についていたレバーを操作すると、真っ黒な汚水が流れ出して水位がみるみる低くなっていき

ザバアアアアアアアアアア

ツツツン

！！

<ぶっはあああああああああああああああああッッッ！>  
汚水を辺りに飛び散らせながら、中から一体のゾンビが起き上がってきた。

<こんのクソボケがあ〜！ めっさ遅いやないけえ〜！ ここまで来るのにどんだけかかっとなねん！？>  
いきなり不機嫌そうだ。

<こつちがバスクリンのカクテル湯に気持ちよう浸かっとなら、遠くの方から人の声が聞こえてきたんで、湯に潜っという驚かしてやろうと待ってたんやッ！>

コイツ……どんな入浴剤の混ぜ方したら、こんなドブみたいな色になるんだよ。

<あんまり時間かかっとなるもんやから、危うく窒息死するとこやったわ！ まあ、ええわ。なあ、折角やし、姉ちゃんも一緒に入らんか？ 肩こり・腰痛・神経痛・リウマチ・水虫なんかによ効くんやけど >

パンツ！

ジル、鬱陶しくなつて一発撃つ。

<ぎ、残念や……生理不順は治せへんわあ………ぶへッ>  
ゾンビ、バスタブに沈む。

「おッ、底の方をしてみる。何かあるぞ」  
そう言っって私が指差してやった。

「何かの……カギか？」

クリスが拾い上げて小さく首を傾げている。

「よし、もうこの浴室に用は無い。出るぞ」

我々は入浴剤で健康を保とうとする意味不明なゾンビを倒し、この浴室に来る手前にあったドアの前まで戻った。

ガチャ……

「よし、開いたぜ」

バスタブで入手したカギを使ってドアを開ける。その先は……

「また外かよ」

またしても淀んだ夜空が目に入ってきた。そこは石畳のL字になった廊下で、周囲を非常に背の高い鉄柵が囲っている。鉄柵の向こう側は雑木林になっていて、柵のスキ間から尖った枝や葉っぱが入り込んでいた。

「コレは……『除草剤』かしら？」

突き当たり近くまで行っただとところで、ジルが地面にポツンと落ちていた袋を発見する。実は、この『除草剤』も館の攻略には必須のアイテムで、私は彼女からソレを預かってバックパックにしまった。

「何だこの空間……何にも無いぞ」

クリスとジルが不思議そうに四方を見つめている。我々はさっきの浴室の前を通過し、左右にそれぞれドアがある箇所までたどり着き、まずは左のドアから入ったのだが……そこは立方体の箱の中みtainな部屋。いや、『空間』になっていて、四方の壁一面に穏やかな色調の絵が描かれている。当然、私はこの不自然な空間に仕掛けられたギミックを把握しているが、そのギミックを発動させるためには、この空間にあるもう一つのドアから先にある部屋へと移動せねばならない。

バタンッ！

「ここはゲストルームか何かか？」

壁際には火のついていない暖炉。中央に木製のテーブルと、黒の皮張りのソファ。そして、暖炉の向かい側の壁に飾られた大きな絵から、金属製の取っ手が二つ飛び出して、その取っ手には

「ウエスカー、戦力の補充といこうぜ」  
クリスが少し嬉しそうに、絵に設置されていた物体を指差して言う。

『ショットガン』。レミントンM870。散弾を発射する武器で、広範囲に弾をばら撒くため複数の対象を同時に攻撃できるが、距離による威力の減衰が大きい。近距離から撃てば、ほとんどのゾンビを一撃で倒せる12番ショットシエル使用タイプ。

ガコンツ……

クリスが嬉々としてショットガンを取っ手から外して手にしたが、その行為により、私が丹精込めて造り上げたトラップの一つが作動した。

(フフフツ、さて……次の局面をどう切り抜ける?)

サンガラスで隠れた私の目は完全に笑っていた。館の廊下に戻るため、さっきの不自然な空間を通過しなければならぬのだが

ガチャツ!

「んん? なんの音だ?」

我々がその空間に戻ると鍵が閉まるような音がし、直後……

ガタガタガタツゴトゴトゴトツゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオオオオオオ!  
オオオオオ!

「なツ、なななななななツ 何だよこりゃ!?!」

空間全体を揺るがす振動とともに、重厚な音が頭上から聞こえてくる。

「マズイ、天井が下がってきているツ! このままでは押し潰されるぞツ!」

私はわざと恐怖を煽ってやった。天井にはペンキで殴り書きしたみたいに、"Kill you"って書かれてるし。そう、この吊り天井トラップは私が姉 建築に委託して施工したモノだ。さすがは 歯建築、イイ仕事をしてくれる。

「ダメだわッ、廊下へのドアにカギが掛っついて開かないッ！」  
ジルがドアノブを握りしめて顔色を変える。

（さあ、二人とも、この非常事態をどう切り抜ける？ ベストな正解は、ゲストルームに戻ってショットガンを元の場所に返し、トラップをリセットする。そして、館の別の部屋にある『壊れたショットガン』と交換することにより、トラップを発動させずショットガンがはじめて手に入る。この一連の作業に気がつくかな？）

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ツツツン！！

「よし、開いたわ。楽勝ね」

「さすがはジル！ 強行突破の天才だぜ！」

「……………は？」

ジルがクリスからショットガンを奪い取り、ドアの鍵を散弾でブチ抜きやがった。

（えッ、ちょ、オマエ等ッ ……！）

完全に想定外だったこの展開に、私は呆気にとられて立ち尽くしてしまふ。と、とにかく二人の後を追わないと。ここにいたら、仕掛けた当人だけが間抜けに潰されるなんて事態に……………。

ゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオ……………ゴゴッ……………

ゴ……………

「……………おい」

吊り天井、停止。どうやら誤作動が起きたようだ。さすがは耐震強度不足を売りした建築事務所、自らが機動したその振動でシステムにエラーが起きちまつてる。私は天井から降ってくるホコリをばらいながら、もう一度天井を仰ぎ見た。

“青春を 全力逆走 24時”

意味不明な文字に変わっていた。



**鉄骨が足りないから耐震偽装！？ 違う、エコだ！（後書き）**

読者様へのお詫び

この作品における挿絵が案の定、著作権に抵触しちゃったようで……運営に殆ど削除されちゃいましたWWW。この件は無念ではありませんが、作品がより多くの人間の目にとまっていると思えば救いかな？

## 箱の中に大山の 代は居ませんでした

非常に釈然としないのだが、ショットガンが手に入って我々の公式戦力が強化された。

「おッ、ここにも何かの部屋があるぜ」

少し先に行った所で二階へと続く階段を発見したが、その手前でクリスが立ち止まって一つのドアを指差している。

（ここは……よし、ここで物資の交換と補給をやっておこう）

実はこの部屋 私にもよく分からない仕組みの物体が設置されているのだが……。  
ボタンッ！

「ここは……物置かしら？」

ジルが薄暗く少々狭いその空間を見回す。床の上には木箱がいくつが散乱し、脚立や段ボール箱もある。壁に造られた簡易棚には、工具のような物が所狭しと並べられていた。

「ん？ こりや何だ？」

クリスの足に小さなボトルのような物がぶつかって転がった。そのボトルを拾ってみると、何とも御丁寧に『携帯用燃料ボトル』と書いてあった。

「多分、コイツの中身を入れて持ち歩くための物だろう」

私は床の隅に置いてあったポリタンクを持ち上げて言った。

「ガソリンか？ けど、屋内でそんなモン持ち歩いてどうすんだ？」

確かにこればかりはヒント無しでは気づきようがない。

「コレ見て。ダレかのメモ書きみたいなのが落ちてるわ」

そう言っってジルが一枚の紙キレを拾い上げた。そこにはこう書かれていた

【死体処理に関する諸注意】・あの化け物どもに関する真実が判った。奴らは死体になっても復活するのだ。ただ、対処方法が

ないわけではない。奴らを復活させない方法は2つある。？死体を燃やす。？頭部の破壊。生きる意志のある者の為に、この洋館の1Fにオイルを用意しておいた。それぞれで、必要な分だけ持つていて、生き残る道具として使って欲しい。追伸：着火する道具くらいは、自分達でなんとかしてくれ！

「おいおい、これってまさか……今まで倒してきた『ゾンビ』とかいう連中が生き返るってハナシか？」

クリスが思わず息を呑んだ。

「とんでもない館ね。しかも、このメモの内容から察するに、結構前から館内がこんな有り様になってるようね。ゾンビではない正常な人間が居て連中と戦っていたとなれば、これは完全に事件よ。住人の捜索や仲間の捜索の前に、あたし達の身の安全も危ういって気がしてきたわ」

バイオレンスなメモの内容から、この洋館を蝕んでいる脅威の大きさを察知したジルが、早速、クリスからボトルを奪い取ってガソリンを入れ始めた。

「ところで、ウエスカー。このやたらとデカイ金属の箱は何だと思っ？」

クリスが壁際にポツンと置かれた直方体の物体を指差し、私に問いかけてきた。そう、その箱こそがこの洋館におけるシステム不明要素の一つ……『アイテムボックス』なのである。このボックスは複数存在しており、中に収納したアイテムが別の場所のボックスからも取り出せるという、四次元仕様になっているのだ。仕組みは全くもって不明だが。

グウオンツ

「おそらく、武器や道具を一時的に預けておける便利な収納スペース……とでも言うべきかな？」

上手く説明できない私は、ボックスの蓋を開きながら適当に切り返した。

「ふ〜ん……けどよう、大切な装備とかを預けちまったら、またここまで取りに来ないといけないってワケだろ？　なんか面倒臭いなあ」

ああ、そうだ。普通はそう考える。が、このボックスは四次元仕様で………って、どう説明すればいいのか。まあ、とにかく、現状で不要なアイテムを中に置いておこう。

「えッ、ちよつと……ダレがいるわよ」

「は？」

横からボックスの中をのぞいてきたジルが、ボックスの中の薄闇に何かを発見した。

<うふううう〜　　ぼ〜く、ドラ　　>

バタンツ！

ウエスカー、慌てて蓋を閉める。

「……………どうかしたの？」

ジルが怪訝な顔して私を眺めている。今のは何かマズイような気がした。よく分からんが、ものすごくメンドーな展開になる予感があったため、我々は早々にこの部屋から立ち去ることにした。

「いいか、さっきのは早めに忘れておけ。ダレも中にはいなかった………そう、ダミ声を出す二頭身のロボットも、アルカノイドが異常に上手いオバサンも中には居なかった。そういうコトだ」

「何言ってるんだよ？　大丈夫か？」

クリスが燃料ボトルをバツクバツクに仕舞いながら首を傾げてる。

ギシギシ……ギシギシ……

我々は階段を上って二階へ移動。横に伸びる廊下の右方向へと進み、墓地の地下室で発見した鍵を使って先にあるドアを開ける。すると、また横に伸びる廊下に出た。今度も右方向へ進み、何かの部屋のドアを発見。鍵はかかっておらず、我々は中へ。

「ここは……館の住人の個室かしら？」

部屋には木製の椅子やテーブル、使えるかどうか分からない蓄音器や、大量の書物が並べられた本棚などがランプの淡い光に照らされている。

「ウエスカー、妙なモンを見つけたぜ」

そう言つてクリスがドアのすぐ側の簡易棚に、ランプの光を反射している物体を発見した。それは

「こいつは『犬笛』だな」

そう、このアイテムもまた、搜索続行のための重要アイテムなのだ。で、犬笛と一緒にやらメモ書きらしきモノも。

今日、スペンサー卿に呼ばれて、「あるもの」を誰にもわからない所に隠せといわれた。色々考えた結果、僕はあるアイデアを思いついた。それは、あの凶暴な飼い犬に守らせればどうだろうか？ ということだ。あの犬はいつもお気に入りの大食堂2階の西テラスにいるし、あそこで君の持つ犬笛を使えば、いつでも呼出せるじゃないか。そこで君にお願いがある。あの犬は君にだけはなついている。どうか君の手であの犬に、この首輪をつけてはもらえないだろうか？ この首輪には、スペンサー卿から渡された「あるもの」が隠してある。君は信用できる奴だから、君に頼みたい。このお礼は必ずさせてもらう。君が前に欲しがっていた例のものが、ツテで手に入りそうなんだ。それでどうだろうか？ すまないが、よろしく頼む。【ジョン・トールマン】

「クリス、ジル……どう思う？」

私は神妙な声で二人に問う。

「きつと、初回限定版のDVDボックスだな」

「いいえ。多分、超高性能のラブドールに違いないわ」

メモの後半部分を追究してどうする。

「いや、そうじゃなくてだな……この『犬笛』の使い道を検討して

欲しいんだが」

「要するに、コイツを吹けば犬がやってきて、オレ達がなんかこう、楽しく愉快的カンジの画になるってワケだろ？」

クリス、どうしてオマエの思考回路はムツゴロウさんとシンクロするんだよ。

バタンッ！

「さて、ここで使ってみよう」

我々は墓場の地下室で入手した鍵と古びたカギを駆使して、メモ用紙に記してあった大食堂二階の西テラスまでやってきた。今のところ、メモにある凶暴な犬とやらの姿は確認できない。

「ジル、吹いてみる」

「ええッ、こんな所で！？ もうくく、ウエスカーったら顔に似合わずイヤらしいわねえ」

「……………犬笛をだ」

「はいはい、分かってますって」

ジル…………どこで覚えたのかはあえて聞かないが、オマエの下ネタは微妙に分かりにくい。

スウウウウウウウウウ

ッ

ジルが思いつ切り息を吹き込むと、人間の耳には聞こえない周波数の音が発せられる。

「ん？ ……………気のせいか？」

約一名、ゴリラがちよっぴり反応しているが。

ジャラン、ジャラン、ジャラン

「来たなッ」

首輪に繋がった鎖を引きずりながら、どこからともなく出現するゾンビ犬。今までの連中より一際凶体がでかく、軽やかな身のこなし。我々はこの敵を迎撃し、先に進まねばならないのだ。

<わんわんお~~~~ッ!>  
夜の帳に鳴き声が木霊した。

## オマエを殺してオレは死なん

<ボクの名前は『パトラッシュ』！ ゾンビ犬一族の頂点に立つ、  
とつても偉いわんわんだおツ！>

「来やがれ、犬畜生がツ！」

犬笛の音色に誘われて、大型のゾンビ犬が一匹……闇夜から舞い降りてきた。

「クリス、この犬に間違いない！ 首輪に何か光るモノが見える。  
メモにあった“あるもの”が装着されているハズだ！」

私はゾンビ犬が逃げないよう、ジルと共に逃げ道に立ち塞がった。  
「テメーに恨みはないが、仲間の捜索に役立つアイテムを持っているからには」

「パンツパンツパンツ！！」

クリスがベレッタを連射し、全弾命中。腐敗の進む肉体を穿った。  
だが、敵の向かってくる勢いは衰えず、その大きな図体を覆いかぶせるように襲いかかる。

<天国へ旅立った『太郎』と『次郎』の仇、ここでとらせてもらおう  
んだおツ！>

異臭を放つ禍々しい口が大きく開き、ヨダレで濡れた剣呑な牙が  
光った。

「やかましいツ、オレは猫派なんだよツ！ テメーなんぞはすぐに  
仲間の後を追わせてやるぜツ！」

噛みつかれまいと、相手の首とアゴをつかんで抵抗するクリス。  
だが、完全にマウントポジションをとられている上、クリスの腕力  
でも容易には押しのけられないパワー。

「ぬツ……ぐう……こんちきしょおおおおおおおおお  
おツツツ！！」

ブンツ

！

クリスは両手でゾンビ犬の首根っこをつかみ、渾身の力をこめて





<はもオ? こ、コレは !?>

今度もムシャムシャしてやるうと得意げなパトラッシュだったが、己が食らいついたモノの異常に気づいて動きが止まる。

「フッフ、おバカなワンちゃんね」

クスクスと不吉な微笑みを浮かべるジル。彼女の手には“自爆ス  
イッチ乙”と書かれた物体が。

<し、しまったおツ!>

パトラッシュが食いついていたのは、色だけ同じのバナナのヌイ  
グルミ。やたら大きいんだから食いつく前に気づくべきだが、そこ  
は悲しきケモノの性。御主人様が投げた物を啜えて拾ってくるのが、  
どうしようもない習性。

「あの世でネロが待つてるわよ」  
カチッ

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

ツツツン!!

ヌイグルミ、BA KU HA TU。

「ああ ツツツ!! オレの『ミラ・ジヨヴオヴィッチ』

があ ツツツ!!」

悲痛の雄叫びをあげるクリス。オマエ……ネーミングセンスがひ  
ど過ぎ。

ドサッ……

頭部が破裂し、胴体が黒焦げになったゾンビ犬の亡骸が地面に転  
がった。

「ふう、なんとか撃退できたようだな」

方法はカナリ強引ではあったが、我々はパトラッシュが装着して  
いた首輪を手に入れ、その首輪に隠されていた『鍵のイミテーショ  
ン』を発見する。

「畜生ッ、何て事しやがんだよ、ジル! アレは妹のクレアから貰

った、とつても大切な又イグルミだつて言つただろ！」

「あたしには又イグルミの苦悶が聞こえていたわ……毎晩、野郎の抱き枕にされ、汗臭くなつて皮脂汚れにまみれたミラ・ジヨヴオヴイツチの声。そう、聞こえていたから安らかに成仏させてやったのよ！」

そう言つてビシツとクリスを指差す。

「そ、そうだつたのか……！ オレがミラのことを苦しめていたなんて……ごめんよ……！ いつかあの世で出会えたら、力の限り洗濯してやるからなア……！」

夜空を仰いで涙ぐむバカが一匹。

「よし、先に進むぞ」

『鍵のイミテーション』を入手した我々は、館の三階にある西洋甲冑があちこちに飾られた場所でトラップを作動させ、先程手に入れた鍵のイミテーションを使ってトラップをリセットする。これにより、また新しい鍵が手に入った。前回の墓場の地下で見つけたヤツには『剣』の模様が刻まれていたが、今度のは『鎧』の模様が刻まれている。この模様は何か意味があるのか？ それとも、この住人の単なるオシヤレ感覚か？ 後者だとすれば、あえて言おう……カスであると。

その後、一階の大食堂まで戻った我々は、暖炉の真上の壁にはまっていた怪しい『エンブレム』を外し、クリスが落下させて叩き壊れた石像の傍まで行つて、『青い宝石』を回収する。ついでに、バリ―が書いた血文字のダイイングメッセージをさり気なく消しておく。口笛吹きながら、三人で協力して足でゴシゴシする。この時、初めて三人の心が一つになったような気がした。

バタンツ！

「よし、次はこつちだ」

玄関ホール二階の中央から、『鎧』の鍵を使って開いたドアの先そこは、細長い廊下が続くテラスになっていた。またしても我



膚の所々が赤く変色し、両手の指先から肉食獣のような長くて鋭い爪が生えている。

「くツ……やるしかないってワケ!?!」

「ああ、そのようだ」

ジルがシヨットガンを構え、私はベレッタの照準をフォレストの頭部に合わせる。

<往生しいやああああああああ

ツツツ!>

一度殺された仲間をもう一度葬る……そんな過酷な闘いが始まった。

## 美少女新キャラ登場がテコ入れ成功とは限らない

くわてと同じように皆ここで死ぬんやツ！ この無念でチーム丸ごと壊滅させたるでえええええ〜！>

「よセツ、フォレスト！ オレのコトが分からないのか！？」

「無駄だクリス！ もうアイツに我々の言葉は通じない……ヤルしかないぞ！」

鮮血が全身の皮膚に染み込んだかのような赤。長く伸びた鋭い爪口からは憎悪が物質化したかのような白い煙を吐き出している。明らかに従来のゾンビとは異なる、相手を殺害する事に特化した威容だ。燃料ボトルが置いてあった倉庫のメモに書かれていた、“復活するバケモノ” おそらく、目の前のフォレストこそがソレなのだろう。

『クリムゾン・ヘッド』 「V・ACT」と呼ばれるT・ウィルスの変種体によって、致命傷を負ったゾンビの体組織が変化し蘇ったクリーチャー。ゾンビとは比べ物にならないほど動作が俊敏。

（さて……クリス、ジル。バケモノと化したとはいえ、かつての同僚……どう戦う？）

この洋館内をくまなく探索していれば、クリーチャー化したチームの仲間に一度は出会っただろうと予測していた。クリムゾン・ヘッドの性能テストにはもってこいの状況だ。だが、二人と付き合いの長いフォレストを倒すことは決して容易では

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ツツツ

ン！！

至近距離からショットガンを撃つクリス。

くぐへええええええええええッ！>

フォレストの体が仰向きに地面へ倒れ、すかさずジルが跳んでき

て彼に馬乗りになり、館内で拾った『閃光手榴弾』を大きく開いた口へ投入。

<はもはもツ！ ふもオオオオオオオオ！？>

ズパアアアアアアアアアアア

ツツツ

ン！！

数秒後、フォレストの頭部が弾けた。辺りに汚い血肉を撒き散らしながら、同僚……滅びる。

(なッ、ちょ……いくらなんでも容赦なさすぎじゃないかッ！?)  
あまりに手際の良い一連の共同攻撃に、私は思わず呆け顔になってしまう。

「ふう、スッキリしたぜ」

「ええ、あたしも」

ええッ、何なの！？ その一仕事終えた後の壮快感あふれる二人の表情は！？

「このクソ野郎……以前、オレの妹を紹介した時、その日の内にナンパしてきやがった。とんでもねえカスだったぜ」

「あたしなんか、署内で幾度となくセクハラを受けたわ。持ってたハンカチのペイズリー柄をペイズリー柄とか言い出すし、“尻を撫でるのに理由があるのかい？”とか言いながらタッチしてくるし……ぺっ(怒)！」

憤怒の目で見下ろすクリスと、ツバまで吐きかけるジル。もうなんか、私の勤務先ってヤダ……。

「片付いたようだな。よし、先を急ごう」

折角の性能テストだったが、二人のヤル気がみなぎり過ぎてあまり参考にはなりそうにない。形見のグレネードランチャーを回収し、次のエリアへ向かうことにした。

その後、我々は今持っている全ての鍵を駆使し、鹿の剥製が壁に

飾つてある部屋に入り、左側のドアを開けて中へ。壁中に昆虫の標本が飾つてある部屋で仕掛けを解除し、『ウインドクレスト』なる物を手にする。ちなみに、クリスは一人で剥製の鹿に喋りかけていた。色んな意味で怖かったので、あえて会話の内容は聞かなかった。「ウエスカー、この館は昔より住みにくくなつたそうだけ」  
「……………そうか」

住宅事情を気にする鹿の剥製つてナニ？

カチャ

「入るぞ」

『鎧』の鍵を使って入つた今度の部屋は 明らかに何だかのトラップが仕込まれたスペースだった。無機質な空間の左右に西洋甲冑が数体並んでおり、侵入者を殲滅したくて仕様がな………そんな妖気を纏っている。

「ここは私に任せろ」

そう言つて私は甲冑達を正しい順番で押し、トラップをリセットした。もし、間違つた順番で押ししてしまうと、毒ガスが吹き出してきて非常に危険な状況に陥ってしまう。これまでの二人の言動から察するに、クリスとジルにやらせてはマズイ。甲冑を破壊したり、毒ガスが充満した部屋の中に私一人を閉じ込めてみたり………そんな暴挙にでる可能性がある。

「よし、アイテムを手に入れたぞ」

宝石箱に入った『目鼻口が封じられた仮面』を発見。そこで私は二人に指示を出した。

「ここから先は別れて探索を続けよう」

「え、どうしてよ？」

当然、ジルは訝しがる。

「怪しいアイテムがこれだけ手に入るといふことは、この館の構造は予測していたのよりずっと複雑だ。このまま一団で行動しては無事な仲間と出会える確率が低くなるし、アイテムの回収にも余計な時間を要してしまう」



「なるほど。で、どう別れるの？」

「私とジルで一階を。クリスが二階を搜索してくれ。ただし、クリスは見たことの無いモノを発見したら、必ず一階に戻って私に報告を。勝手にアイテムを使用したりするなよ」

「ああ、任せてくれッ」

ものすごく頼もしい笑顔で切り返してきたが、完全に初めてのオツカイに出される子供的な扱いだ。

「気をつけてね、クリス」

「そっちこそな」

軽く笑顔を交わして別れるジルとクリス。このタイミングでの別行動がどのような結果を生むのか、この時点では私にも予測できない。

「さあ〜とて、ここのドアから行ってみるかな」

一人で遠足に出かけるようなノリで、クリスは鍵を使って中へ。

そこはL字の廊下で、廊下の曲がり角にはなんと

「おッ、オマエは……レベツカか!？」

「あッ、クリス先輩！」

一人の女性隊員が床の上に座り込んでいた。『レベツカ・チエンバース』 18歳。血液型・AB型。身長161センチ。体重4

2・1キロ。衛生担当。化学知識に優れ、18歳にして大学も卒業済み。マイペースな性格。赤いバンダナを愛用している。

「おいおいッ、リチャードじゃねえか！」

駆け寄ったクリスが目にしたのは、レベツカに膝枕されて息も絶え絶えの男性隊員。体中から出血し、顔面蒼白。明らかにヒドイ有り様だ。『リチャード・エイケン』 23歳。血液型・AB型。身長172センチ。体重62・5キロ。通信担当。陽気な好青年。人情の機微を読むことに長けており、年齢も近いことからレベツカの指導役として行動した。

「ク、クリス……この館はヤバイ……早くここから出るんだ。とん

でもないポケモンが……いるぜ……うぐッ」

「ポケモン？ ゾンビや犬っコロのことか？」

「いいえ、違うっス。毒蛇に咬まれたみたいなんスけど、その傷口が信じられないほど大きくて……」

レベツカの口ぶりだと、どうやら新しい敵の登場のようだ。

「“アイツ”は毒蛇なんてモンじゃねえ……あれはまさしくポケモンだッ！」

「『血清』が必要っス。けど、別の部屋に置いてきてしまっ……」  
単独行動を始めた途端に難関任務が発生した。

「よしッ、任せろ。オレが行こう」

クリス、安いヒーロー精神が発動。

「急いでください……そうはもたないっス。血清は一階食堂の北西にある個室っス」

「ああ、待つてる。すぐ戻るッ！」

そう言って飛び出していくクリス。これまではウエスカーの先導があつたので、洋館内で迷う事は無かつたが、今回はクリス一人。

幾度となく部屋を間違えつつ、蘇ったゾンビ共を葬りつつ、なんとか目的の部屋に到着する。

「……………どれだ？」

部屋の中にはデスクと椅子、小さめのベッド。それに、薬や化学薬品が大量に並んだ棚があつた。クリスは棚の前に立ち、アゴに手をあてて普段は決して使用しない脳ミソをフル活用しはじめる。

【棚の中身】 〓 消毒液・クロロホルム・硫酸・塩酸・血清・正露丸・ウスターソース・アニメDVD（プ キュア）……等々。

「よし、分かん時は全部持っていきゃあいい。うん、そうしようッ！」

クリス、棚に並んだモノを手当たり次第にバツクパツクへ放り込む。果たしてこの行為がどのような結果を招くのか……。

パンツが見たいんじゃない！ パンチラが見たいんだ！

私とジルはクリスと別れた後、一階のまだ探索が済んでない箇所へ鍵を駆使して入っていく。壁に幾つかのステンドグラスが並んだ部屋で仕掛けを解除し、『口を封じられた仮面』を入手。次に入った部屋は

「これって……植物園か何か？」

部屋の様子を見たジルが小さく驚く感じで呟いた。部屋の中は、本当に屋内なのかと思ってしまうような様相だ。壁際には雛壇式の植木鉢置き……床にはコンクリートで囲いを造った花壇……中央には小型の噴水まであって、勢い良く水が噴き出している。辺りには雑草が伸び放題で、カナリ長く手入れがされず放置されてきたのが分かる。

「あ、アレって……！？」

ジルが何かを発見した。噴水から噴き出す水に見え隠れする、『仮面』。壁に備え付けられている。そして、彼女が一步前に出ようとしたその時。

「待つんだッ」

私は右腕を伸ばして彼女を制止する。

「……………どうかしたの？」

ジルが怪訝な顔をする。

「噴水の下の方をよく見てみる」

そう言って私が指差した先には

ウネウネウネ……、ウネウネウネ……

「き、気持ち悪ッ！」

ジルがあからさまに不愉快な面を見せた。我々が目になっているの

は、噴水の水溜りから生えている十数本の『蔦』。ただし、普通の蔦ではなく、赤ん坊の腕ほどの太さがあつて、しきりにウネウネとつごめいているのだ。近づいてくる生き物を分別なく捕食しようとする、凶暴な野生動物みたいな雰囲気を漂わせている。

「気をつける。おそらくはアレもゾンビ共と同じく、何だかの変異を起こした生物に違いない」

「なるほど……なら、どうする？ アレに接近しない限り、壁にあるアイテムはとれそうにないわよ」

ちなみに、噴水の手前には場違いな看板が設置されていて、こう書かれている。

【男性が近づくとエライ事になります・女性が近づくとエロイ事になります】

「……………」 ジル、とりあえず行ってみる」

私は少しの沈黙の後、冷静な声で彼女の背中を押した。

「いやいやいやッ、どう考えてもあたしが行ったらダメじゃん。画的に描写がマズイ事になるじゃん」

ジル、必死に手の平を左右に振る。

「いいか、ジル。どのような作品にもある程度の“ガス抜き”が必要だ。物語が長くなれば、どうしてもマンネリ化が始まる。そんな状況を効率的、且つ確実に打破するための要素……つまり、『エロス』だ。回収屋は日頃からこう言っている “エロが世界に蔓延すれば、世界中から戦争や紛争が消える” と」

「せいやッ!」

ジル、ウエスカーの背中を思いつ切り両手で突く。

「はうあッ!？」

前のめりにブツ倒れ、噴水の前で土下座するような形で天を仰ぎ見れば、人間の接近に反応した怪奇植物がその異様な触手をウネウネと。そして……

ベシベシッ！　グイグイツ！　ブウウウウウ~~~~ン！

触手でビンタされ、首を絞めあげられ、プロペラみたいに振り回されて……

ドサッ

ジルの前に返却された。

「うろうう……とんでもないパワーだ……」

グラスンのずれたウエスカーが床の上でピクピクしている。

「うっわあ~~~~……要するに、あたしに犠牲になれと？」

「……………た、頼む」

ブツ倒れたままで親指を立てる。

「さあてと」

バックパックから『除草剤』を取り出して、ドア付近で小さなエンジン音をたてる給水用ポンプにザザアア~~~~と投入。ポンプの中の水が瞬く間に朱色に染まった。

「エロキモイ植物さん、さよ~~~~ならあ~~~~」

クイツ

ポンプのレバーを操作すると、噴水から噴き出す水も透明から朱色に変わり、やがて……

ウシャウシャ　　ウシャウシャ　　シャアアアアアアアア

ッ！

劇薬を浴びた蛇のように全身を激しくくねらせ、数秒後……完全  
に動かなくなった。

「よ~~~~し、よし！　これにて安全~~~~」

軽く犠牲となった自分の上司のコトなど気にもとめず、前進する  
ジル。だが

「ッ、きゃあああああああああああああああああああああ  
あああああッッッ!?!」

不意に木霊する絶叫。

バタンッ!

「ど、どうしたッ!? 何事だッ!?」

館中を震撼させんばかりの絶叫を聞きつけ、目を丸くしたバリーが飛び込んできた。で、そんな彼が最初に目にしたのは……その……あの……いわゆる……

「ちょッ、や、ヤダッ! 離しなさいよオ

ッ!」

長くて太くてビクンビクンと不気味に脈打つ数本の触手に、両手両脚を絡め取られ、M字開脚の状態で空中に吊り上げられたジルの姿。とどのつまり 触手プレイ。

<甘いんじゃボケがああああああああ! 除草剤ごときで、わてのとめどなく湧き上がる劣情をどうにかできると思ったかあ!?!>  
「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいッッッ! 植物が喋つてやがるううううううううううッッッ!」

ザ・怪奇現象に、バリーも腰を抜かして床の上でM字開脚。

<フヒヒ、久しぶりの上玉やないか〜。とことん悦ばせたるでえ〜>

ヌラヌラと黒光りする触手がジルの頬をなぞり、服の上から彼女の胸元と下腹部を執拗に攻めてくる。それはもう、イイ感じで。

「やだやだやだッ! あたしはこの手の趣味は無いんだってッ!」  
本気でイヤがるジルは既に涙目だ。

「う、うううう……バリー、ケータイを使え……」  
倒れていたウエスカーが虫の息で呼びかけてきた。

「えッ、ケータイ? あ、ああ……なるほどッ、警察を呼ぶんだな?」

ジルから渡されたケータイを取り出す。警察は一応オマエ等だけどね。

「ケータイの撮影機能をフル活用し、この惨状を最後まで記録……す、するんだ……ッ」

「……………は？」

バリーの手がピタツと止まる。

「いいか、よく聞くんた。私にやましい意図は無い（キリッ）……この映像をネットで流し、想定外のクリーチャーに出会った際の対処法を、一般の人々に伝授したいんだ（グラサンがキラ〜ン）」  
「い、いや……………通常生活でクリーチャーに出会ったりしないし（汗）」

バリーが珍しく冷静にツッコんだ。

「ちよつとアンタ達ッ、早く助けなさいよオ

！！」

「ジル……申し訳ないんだが、少しの間だけ犠牲になってくれ。全ては世界平和実現のため。そういう事だッ！」

何の根拠があつてそんなに力説するのか知らんが、触手プレイの撮影で実現する世界平和はのーさんきゅーだ。

「し、仕方ない…………俺も二人の娘を持つ父親。ここで退いては娘達に“触手プレイはワールドワイドなプレイなのよ！”とか、家に帰つてから怒られそうなんだな。よし、この撮影…………俺に任せてくれッ！」

そう言つて、捕縛されたジルにケータイのカメラを向けるバリー。その様子はとても静かで荘厳。オヤジよ…………家で娘達が泣いてるよ。＜残念やなあ、姉ちゃん。仲間はアホばかりみたいやし、諦めて体の力を抜きなはれや〜。匠の技うちゅうモンを、その肉体に刻み込んだるでえ〜＞

注意 作者が急な体調不良のため、近所の妖精さんに代筆を依頼しました。結果、下記のような描写になりました。御了承ください。

く仄かに紅潮したジルの頬〜半開きになった口からは、艶めかし

い吐息が漏れ

　　～ 蠢く肉の蔦が全身を這い回り　　～ 彼女の敏感な箇所をの神経を、  
優しく侵す

　　～ 次第に嫌悪感好奇心へと変わり　　～ 痛みは心地良いアクセシ  
トへと変貌する

　　～ バストの膨らみを蹂躪され　　～ 唇と舌をされるがままに弄  
ばれ

　　～ 太ももに絡み付いた蔦は、ムッチリとしたその感触を楽しみつ  
つ

　　～ ショーツの上から毒蛇のように、ピンポイントな刺激  
を与えてくる

　　～ 「ああああ………ハフう………ら、らめえええええええ  
」

「　　つて、やってられるかあああああああああああああ  
あああああツツ！」

　　ザクザクザクツ！　　ザクザクザクツ！

　　自力で束縛を解いたジルが、コンバットナイフで応戦。あつとい  
う間に肉の棒………じゃなくて、肉の蔦の残骸が出来上がる。

　　くわ、わいの負けや………最期に姉ちゃんみたいな最高級の女体をビ  
クンビクンさせられて………よ、よかったで………ゲフツ>

　　不埒な植物、死亡。で、ジルの視線は早速、すぐ近くで男前な面  
している同僚と上司に向けられる。

「　　………よし、撮影終了。撤収ッ！」  
「　　待てやッ、ごらあああああああああああああああああ  
ああツツッ！」

　　逃げた。二人のオッサンは何かをやり切った爽やかな表情で逃げ  
た。



猫踏んじやった　　猫踏んじやった　　猫踏んづけちゃったら、中身出た

「待たせたな、リチャード！　どれが血清なのかよく分からんが、多分この中にあるハズだ！」

戻って来たクリスが介抱しているレベツカの前に、大量の薬ビンに混じってガラクタをブチ撒けた。

「ええつと〜〜……………あ、あつたつス！　コイツで何とかできるつスよ！」

早速、レベツカが応急治療にとりかかる。クリスはその間に近くの部屋を探索し、『楽譜の中間ページ』というアイテムを入手。レベツカとリチャードの様子を見守っている間、ヒマになったんでバナナを食ったり、持ってきたガラクタの中から絵本を取り出して読んだり。

「ふむふむ、“生きてるパンを作った”。“すると、保健所の人がやって来て、連行されちゃった”。“包装もされていないパンが、空を飛んだり近所でダレかと戦ったりするのは、衛生上大変良くないから”……………なるほど」

「クリス先輩、何を読んでるつスか？」

「アン　ンマン」

民事訴訟の対象になりそうなヒーローだな。

「よし、一通りの処置は済んだつス。リチャード先輩、しばらくここで休んでいるつスよ」

「ああ、すまない……………後はオマエ達に任せて、一休みさせてもらうつス。そう言っつて、リチャードは壁にもたれ掛り目を閉じた。

「あ、そうだ。レベツカ、他のメンバーはどうした？　この館の中にいるのか？」

「それが……………気持ちの悪いバケモノ達に襲撃されて、バラバラになつてしまつたつス。自分は無線機を持つてなくて……………」

「そうか……………新入りの身で大変だったな。だが、もう安心だ。一階

にはウエスカーとジルもいるし、手負い（精神的に）ではあるが、バリーもいる。さあ、コイツを食ってエネルギーの補給だッ」

えらく能天気な笑顔でバナナを差し出してくるクリス。

「いや、いらないつス」

即答。

クリスとレベッカはウエスカーとジルのペアと合流するため、一階へと向かうが、探しているうちに初めての部屋へ。

「ここは……バーかな？」

潇洒な造りのバーカウンターがあつて、部屋の中央にはピカピカに磨かれたグランドピアノが。

「よし。ゾンビ共のいる気配は無いし、飲もうぜ！」

「……………マジッスか？」

カウンターの棚に並んだ沢山の酒ビンを見つめ、クリスがアゴに手をあててニヤついている。

「おおッ、ロマネ・コンティがあるぜッ！ こりゃ飲むしかないなッ！」

クリスはすっかりキャバクラの客みたいになつてる。

「珍しいワインなんスか？」

「少し前にウエスカーと銀座で飲んだんだが、その時おごつてもらつてよ。メチャクチャ美味くて、メツチャ高かつたんだよ」

クリス、一応言っておくがここはアメリカだ。

「えッ、いくらしたんスか？」

「ん？ 確か……………40万近くしたかなあ？」

「ま、ままままままッ、マジッスかッ！？」  
レベッカの目の色が変わる。

「なんでも、フランスの特定の地域で採れたブドウのみを使って造るヤツで、数も少なくいから高いんだとき。オークションとかで当たり年のヤツが、260万なんて値段で競り落とされた事もあるらしいぜ」

「に、にににににッ、ニヒヤククジュウま

ん！？」

何が彼女をそんなに興奮させるのか……瞳の中に　を浮かべながら、レベツカが軽く鼻血を吹いた。

「お、おい……大丈夫か？」

後輩のただならぬテンションに、クリスがたじろぐ。

「保護するっス！　この部屋にある全ての酒をラクーン市警のの名のもとに、ことごとく保護するっス！」

レベツカの鼻息が荒い。

「いや、酒を保護って……それより、仲間の搜索を続けねえと」

「え？　あ……ああ、そうっスね。危うく失念するところでした……アハハハハ（汗）」

で、クリスはロマネ・コンティを近くにあつたグラスに注ぎつつ、部屋の様子を見渡してみる。

（……ん？　ピアノか……そういえば『楽譜の中間ページ』ってヤツを見つけてたな。と、なる）

いつもは決して使わないザ・脳みそをフル活用し、部屋の隅で『楽譜』を発見する。

「よし、完成だ。流れるには、この楽譜を使ってピアノを弾くべきシチュエーションなんだが……」

クリスにピアノは弾けない。って言うか、弾けたら画的に気持ち悪い。

「どうしたっスか？　もしかして、ピアノが弾きたいんスか？」

「ああ。ウエスカーもこの館内で見つけたアイテムで、次々と仕掛けを解いていたからな……おそらく、この楽譜を使えば何か起きるんじゃないかと思うんだ」

クリス、バナナを同時に二本食いしてる。やたらと脳内で糖分を使用しているらしい。

「それなら自分に任せるっス。得意ではないっスけど、一応は一通り弾けるっス」

レベツカは少々自慢げに胸を張って椅子に座り、鍵盤にソツと手をそえる。そして

科学の限界をく超えて　私はく来たんだよ　ナ  
イフはついてないけど、出来ればほしいな　あのねはくやくく、  
洋館に入れくてよ　どうしたの？　試験管ずつと見つめてる  
く　君のこと　バイオバイオにしてあげるく　救助はまだね、  
頑張るから　バイオバイオにしてあげるく　だからちよつと  
く覚悟をしててよね　バイオバイオにしてやんよく　最後  
までね、頑張るから　バイオバイオにしてやんよく　だから  
ちよつとく自爆してあげて　バイオバイオにしてあげるく  
世界中の誰、誰より　バイオバイオにしてあげるく　だか  
らもつとく私に戦わせてね

とりあえず、無難に弾いてみた。

「……………何の曲だ？」

「さあ……………知らないっスね」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ

！

ピアノを弾き終わると同時に部屋の壁が一箇所、シャッターのよ  
うに迫り上がって、一本の廊下が彼等の前に出現した。

「よし、レベッカはここで待て。オレが行って調べてみる」

「了解っス」

クリスがベレッタを構えて慎重に中へと進むと、その廊下の突き  
当たりに、石の台座に立つブロンズの像があった。そして、石の台  
座には黄金に輝く『ゴールドエンブレム』がはめこまれている。

「こいつはスゲえ……………全部金で出来てるのか？」

ズシリと重いゴールドエンブレムを手に取り、クリスが軽く溜息  
をもらす。

「金ッ！？　マジっスカ！？」

クリスの声に反応したレベッカが、またしても目の色を変えて廊下へと駆け寄って来た。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ  
ズン……

「……………あ」  
隠し扉が自動で下りてきて閉まった。中にクリスとレベッカがいるのに。

「し、しくじったつすうううううううう！！」  
灯火に群がる害虫みたいに、ゴールドエンブレムへ吸い寄せられた結果……閉じ込められた。

（だ、ダメっす……開閉のためのレバーもスイッチも見当たらないっす！）

見事なまでにトラップに引っかかっている。最悪だ……二人して閉じ込められては、無線機を持っていない現状、助けを呼ぶこともできない。

「いやっすうううう　　ッ！　こんな所で、進化に失敗したゴリラと一緒に果てるなんてえええええ　　ッ！」

レベッカ、両手で頭を抱えて悶えちゃう。

「ふ〜む、コイツをはめ込めばいいんじゃないか？」

ガコッ……

クリスが一階の大食堂で手に入っていた『木製のエンブレム』を使った。すると……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオ  
！

隠し扉、開く。

「よ、よよよよよッ、よかったっスう~~~~（泣）！」

レベッカ、ゴールドエンブレムに頼ずりしながら尻もちついてる。「ふう〜、なんとかあったな。レベッカ、今度こそウエスカー達と合流するぞ」

「わ、分かったっス。あ、先輩……………」

「どうした？」

「恥ずかしながら…………アハハハ、こ、腰が抜けちゃったみたいで…先に玄関ホールへ行って待ってて欲しいっス」

「なんだよ〜、情けねえなあ。しっかりしてくれよ」

クリスはそう言っただけで苦笑いしながら先に部屋を出て行った。そして、残ったレベッカはすぐに立ち上がると、ついさつき“持っていない”と言っていた無線機を取り出し、電源を入れた。

「……………こちら、レベッカ。クリス先輩と合流し、現在、一緒に行動してるっス」

<よし、ヤツは他人を疑うという事を知らん朴念仁だ。上手く手綱をひいて操作してやれ>

「了解っス。ところで…………“特別ボーナス”の件、忘れないでくださいっスよ」

<心配ない。この作戦が首尾良く終了すれば、片手ではつかみきれない札束で引っぱたいてやる>

「クフフフッ、楽しみにしてるっスよ…………“ウエスカー隊長”レベッカの口元が不吉に歪んだ。

ただし、バリーは尻から出る

「……………おい、何が起きたんだよ？」

『ゴルドエンブレム』を手に入れ、ウエスカー達と合流するため立ち寄った大食堂にて、クリスが呆けた顔で立ち尽くしている。彼の目の前には、御手製の十字架に磔にされたバリーと、スマキにされて天井から荒縄で吊るされたウエスカーの姿が。

「この男共はあたしを辱めた罰により、猛省してもらってるところよ（怒）」

テーブルの上の燭台に淡い火を灯し、ジルが“ダレだよアンタ！”って言いたくなるくらい悪人面で椅子に座ってる。

「く、クリス……助けてくれ……………俺はただ、ちよっとその場の空気にのまれちまつただけなんだ」

救いを求めるバリー。額には『父親失格』とサインペンで落書きされてるし。

「く、クリス……どうにかジルのなだめてくれ……………後でオマエにもイイ物を観せてやるから」

取り引きを持ちかけてくるウエスカー。股間に『制御不能』って書かれた紙が張られちゃってるし。

「勝手に喋るなッ！ さあ、早く白状しなさい……………あたしのケータイをドコに隠したのッ!？」

前回の触手プレイで露わにしてしまったジルの痴態。その光景を撮影したケータイを、ジルに追いかけられる最中、二人の男共はドコかに素早く隠したようなのだが、現在……………ジル審問官がその場所を問いただしているようだ。

「そ、それは言えないッ……………あの動画をニコニコ動画にアップするまで、私は黙秘権を行使させてもら……………うぎゃああああああああああッッッ!」

あくまで抵抗するウエスカーに対し、ジルは燭台の火を彼の頭に

近づけて拷問。

「ふう〜…：…なんかよく分かんねえけど、じゃあオレは任務を続けるぜ」

空気についていけそうにないと判断したクリスは、暖炉の上のエンブレム（木製）がはまっていた所に、ゴールドエンブレムをはめた。すると

ガコンッ！

何かの装置が作動するような金属的な音がし、壁際の柱時計の蓋が開いていた。

「おおッ、やっぱり仕掛けがあつたみてえだな」

得意そうな顔してクリスが柱時計に近づく。

クルッポお〜〜〜！ クルッポお〜〜〜！

いきなり飛び出してくるハトのギミック。ベストのタイミングでクリスの眉間に直撃。微妙に血が出た。

「ふ、フザケンなよ……………ん、コイツは!？」

ハトのギミックが金属の物体をくわえていた。それは 『盾の力ギ』。剣と鎧に続き、また新しい力ギが手に入った。

「よ〜し、コイツでどこかのドアが開くってワケだな。バリー、一緒に行こうぜッ!」

“磯野、野球やろうぜッ” みたいなノリで声をかけてみるが、礫にされたままの二児の父親は、すっかりうなだれたまままでヤル気無し。

「仕方ないわねえ……………ま、バリーはカナリ反省してるようだから、解放してあげるわ。感謝しなさいよッ!」

「スマン……………今回の件はうちの家族には内密に頼む」

「はいはい、分かったからしっかり働いてきなさいね」

で、解放される被疑者・バリー。こうして二人は二階へと移動し、まだ休憩中のリチャードにバリーがしんみりとした顔で挨拶し、一



このドアの前に立った。

「おッ、レベッカ。オマエも来てたのか」

ドアの前には、まるでここに来る事を予測していたかのように、レベッカが両手を腰にあてて待機していた。

「このドアが何か怪しいッス。先輩、カギは持ってるッスか？」

「ああ、任せろ。よし……二人とも、中にはどんなバケモンが待ち受けているか分からない。油断するなよッ」

「了解ッス！」

「妻よ、娘達よ、俺は一時の邪念を洗い流し、真人間として家に帰るからな！」

心の準備も完了。

カチャ

解錠され、ドアを開く。

< ちあ、ボクの名前は『ヨーン』！ 見た目通りの気さくな爬虫類さッ！ >

ボタンッ

閉める。

「……………おい、レベッカ……………今、ナニかいなかったか？」

「い、いたッスね……………」

ドサッ！

クリスとレベッカが顔を見合せながら引きつる傍で、バリーが一言も絶叫することなく崩れ落ちて気絶した。人間、ビックリする限界が越えると、無言で頭のサーバーがダウンするらしい。

「よ、よ……し……………もう一度開ける……………ぞッ」

「わ、分かった……………ッス」

ガチャ

<やあ、ボクの名前は『ヨーン』！ 文字通り首を長〜くして待っていたよッ！>

ボタンッ

再度、閉める。

「いやいやいやいやいやッ！ アレはあり得ねえって！ ヘビか！？ マジでヘビなのかあ!？」

「で、ででででででッ、デカ過ぎるっス！ カバも丸呑みにできそうなくらいの大きさだったっス！」

『ヨーン』 10メートル程の巨体に猛毒を合わせ持つ大蛇。

胸部の直径が全長に対しアンバランスなほどに太く、体表には鱗ではなくカエルのような皮膚をもつ。元は実験体であったが逃げ出した後にウィルスの影響から巨大化しており、洋館内の通気管などを移動している。毒は強力で噛まれれば人間でも数分で死に至り、その効果は血清でしか消すことができない。

「レベッカ、オマエはベレッタで後方から援護してくれ。オレはショットガンで突っ込む」

「無茶っス！ あんな規格外なモンスターに銃弾が効くかどうか……！」

「無茶は承知！ だがな、この中にケガをして動けない仲間が居るかもしれん。見過ごすワケにはいかないんだよ！」

「せ、先輩ッ……カッコ良いっス そこはかとなくカッコ良いっス」

レベッカ、思わず頬を桃色に染めちゃう。

「よ〜し、いくぜッ！ ……………っつと、その前にだなズリズリズリ……」

気絶したままのバリーを引きずるクリス。

「レベッカ、オレが合図したらドアを素早く開けるんだ。いいな？」  
「……………あ、あ〜、先輩？ 何をヤル気っスか？」

レベッカがものすごくイヤな汗を噴きながら質問してみる。

「何って……速攻でバリーを投げ込むんだよ。で、大蛇がバリー（エサ）に食らいついてる間に、オレ達で部屋の中の捜索を行うんだよ」

クリス、屈託の無い表情がとっても怖い。

「前言撤回っス……先輩、死んだら確実に地獄へ落ちるっスよ」

レベッカが絶対零度の視線を送りながら小声で呟く。

「甘いことを言うんじゃない！ 野生の世界では当然の行為だ！」

コイツ、そろそろ人類やめそうだ。

「じゃ、じゃあ……開けるっスよ」

「よっ……と。よし、今だッ！」

ガチャ

三度目のオープン。そして……

ポイツチヨ

犯罪に巻き込まれた人が海へと捨てられるみたいに、バリーが部屋の中へと投げ込まれた。

「よしッ、行くぞッ！ 突入だアアアアアアアアアアアアア！」

シヨットガンを構えた状態で駆け出すクリス。

「やあ、いらっしやいお客さん。ボクの巣にようこそ。アレレレ」

「？ このオジサン……どうかしたのかな？」

床の上で失神したままのバリーに気づき、大蛇が近寄って来た。

（やったっス！ 罪悪感で気がひけるっスけど、作戦成功した様子っス！）

レベッカはなるべく足音をたてないように、泥棒みたいに身を低くして爪先立ちで移動する。

「くそッ、仲間の姿は無いか………お、コイツは？」

物置のようなこの部屋の隅で、明らかに目立っている物体を発見する。それは『鼻が封じられた仮面』だった。

「よしッ、これでこの場所には用は無いな。レベッカ、早くバリー

を引きずって」

と、仮面を拾ったクリスが振り向けば……

<モ〜グモグ、モ〜グモグ、人間はやっぱりこの喉ごしがたま  
んないよねえ〜>

「ふぎやあああああああああああッッッ!? 暗いぞツ、  
臭いぞツ、生温かいぞオオオオオオオオオ  
!!!」

目を覚ましたバリーが、大蛇に丸呑みにされている真つ最中だつた。ヨーンの口から飛び出した彼の両脚が、先程から必死にバタついている。

「この野郎ツ、バリーを食うんじゃねえツ! 吐き出しやがれえええええええええええッ!」

ズドオオオオオオオオオ! ズドオオオオオオオオオ! ズドオオオオオオオオ!

クリスがショットガンを連射する。的が大きいのでクリーンヒットしているが、大蛇はほとんど意に介することなく食事を続行。

ペロリッ                      ゴクッ

「……………あ」

クリスとレベッカが同時に間抜けな声を漏らす。

<ごちそうさまでしたア〜〜! ……………げえっぶ>

バリー、殉職。

「このクソ爬虫類がああああ! よくもオレの仲間をおおおおお!」

激昂するクリス。バリーをエサに使った事実など無かったコトにして。

ザクザクザクッ!

痛い、痛いッ! 痛いよオ〜〜! ボクの敏感肌を刃物で刺さない

でよ〜！>

銃弾では効果が薄かったため、今度はコンバットナイフで大蛇の腹を何度も突く。すると

ゴポンツ……ゴボゴボツ……

刺激された腹が急にうねりだし、水っぽい生々しい音がクリスの耳に聞こえてきた。

<は、はうううう

ん(苦)！>

ブシャアアアアアアアアアアアアアアアア

ツツ

ッ！！

苦悶する大蛇のシッポの方から大量に吹き出される………物体。様々な汚物にまみれ、尋常じゃない悪臭を纏っちゃったバリーが排泄された。要するに……下痢だ。

「う、うううう………た、助けて……ク、クリ」

「よし、撤収ッ！」

「了解ッス！」

ザツザツザツザツ……

踵を返して部屋を後にする仲間二名。残されたバリーにヨーンが顔を近づけてきた。

<なんか大変だね、オジチャン。ボクでよければ話を　　つて、臭ッ！！>

シユルシユルシユル〜

穴のあいた通気管から逃げていく大蛇。結局、一人ぼっちになっ  
てしまった未消化物<sup>バリー</sup>は、ゆっくりと立ち上がり、バックパックから一枚のゴミ袋を取り出す。そして、自ら袋の中に入った。

「ダレか……俺を出してくれ」

ポツリと一言呟いた。

一人でできるもん 【ゴリラ（ ）編】

「お〜い、ついにこの気味の悪い仮面が四つ全てそろった

ぞッ!？」

報告のため、レベツカと共に大食堂へ戻ったクリス。彼の目の前には、一体、ドコから持ち出してきたか不明な三角木馬……そしてその上には腕を後ろ手に縛られたウエスカーがまたがってる。

「まったく、本当にしぶといわねッ……さあ、言っのよッ! あたしのケータイをドコに隠したワケ!？」

「んんん                    ツッ!!    んっんっんっ……ん                    ツッ!!

ん~~~~~」

鬼のごとき尋問を繰り返すジルに対し、ボールギャグを啜えさせられたウエスカーは、苦悶したり微妙にナニか感じちゃったりで忙しい。

「あのよオ……エスカレートしちまってるよと申し訳ないんだが、使えそうなアイテムがそろったからさあ、墓地の地下に行こうと思っただが」

「はいはい、勝手にどうぞ。あたしはこのクソヤロウを更生させなきゃならないから」

そう言っつて、乗馬用のムチで自分の上司をシバくのに夢中。更生する前に、別の何かが開発されそうな勢いだが。

「クリス先輩、コレって……」

「何も言っつな。そして、見るな。大人には色んなしがらみや事情がある……そんなカンジだ」

この光景を指差すレベツカを制し、クリスは静かにドアを閉めてこれ以上は関わらないことにした。

「よし、仮面をはめていくぞ」

クリスはレベツカを連れ、墓地の地下にある不穏な空間に再び訪







クリムゾンの長い爪が、クリスの死角から彼の首筋めがけて突き  
込まれ

ガッ……

<な、なんやてッ!?!>

クリムゾンの手首がガツチリとつかまれる。その手は、目の前に  
いるクリスとは別の方向から伸びていて、一瞬後には感触だけをク  
リムゾンの手首に残して消えた。

「フッ……オマエが貫いたのは残像ではない。本体だ」

ん？

ちよつと待て。今のセリフ、何かおかしくなかつたか？ 不敵に  
微笑んでいるクリスだが、首筋からは勢い良く鮮血が噴き出してる  
ぞ。もう、なんか……ピュ……って。

「し、しまったッ！ 逆じゃねえかよッ！ ……………げふッ（泣）」  
俯けに倒れ伏すクリス。

<こ、コイツ……アホや。うつわあ……、恥ずかしいわあ……

……………（汗）>

なんだか自分までスベったみたいない気分陥り、クリムゾンは引  
き気味。ミラクル・ゴリラパワーという珍妙なイベントは、不発に  
終わってイタイ空気だけを残してしまった。

「せ、先輩ッ、しつかりするっス！」

鉄格子の向こうからレベッカが声をかけるが、クリスは首からド  
クドクと血を流してピクリとも動かない。これは……………マジでピ  
ンチっばい。

<他愛もないのオ……。さて、この館に侵入したアホ共全員、わて  
が皆殺しやッ！ 今日も元気にジェノサイドや……!>

（これは想定外っス……!）

焦るレベッカは通信機を取り出し、コールしてみる。が、通信相  
手……ウェスカーの応答は無い。どうやら、未だにジルの羞恥拷問

を受けているようだ。

「むう〜、使えない上司っス！ こうなったら………ヤルしかないっスね！」

ガラガラガラッ

鉄格子が上がる。

「なんや、えらくキュートな小娘やないか。けどなあ、わての殺害欲求は小娘相手でも容赦せえへんのだやえ〜〜！>

接近するクリームゾンに対し、レベッカはベレッタを構える。

（敵のフットワークはカナリ軽い……自分の射撃技術では難しいっス……！）

どうしても彼女の視界に倒れたクリスの姿が映る。次の瞬間には我が身もあなるのだという思いが宿ってしまった。

「自分、ここで死ぬワケにはいかないっス！ 死ぬ時は豪邸の札風呂の中で決めてるっス！」

ダッシュユツッ！

レベッカ、口から願望を漏らしつつ回れ右。ザ・逃走

<逃がすかい、このポケがあああああ！>

10本の凶器が薄闇の中でドス黒く輝き、次なる獲物を狩るべく振り上げられ

グイッ……

<ッ!? な、なんやてッ!?>

クリームゾンの足首を力強くつかむ手。その手の持ち主はもう片方の手にバナナを1本握りしめ、口で皮を剥き始めた。

「せ、先輩ッ！」

レベッカが喜びと不安の混じった声を上げる。

「ついに……ついに、コイツを口にする時がきたぜッ」

モシヤモシヤ……モシヤモシヤ……

食ってる。首から大量に出血しながらも、美味そうにバナナを食っている。

<タフなヤツやのう。まあ、ええわ。すぐにトドメさしたるでッ！>

ヒュン

クリームゾンがまたしても野生動物のような俊敏な動きで間合いをつめ、クリスの死角から鋭利な爪を

「あゝゝんぱんちイイイイイイ　　！！！」

<ひでぶウウウウウウウウゝゝ！！>

荒唐無稽なクリスの裏拳を食らって、クリームゾンの顔面が潰れた。

<うつつツ……………な、なんでや！？　どこにそれほどのパワーを！

?>

フラフラしながらクリームゾンがクリスを指差す。

「テメーはオレに究極のバナナの摂取を許可しちゃったのさ。この、完全無農薬・有機栽培・日本産の完熟バナナ…………その名も『岩崎さん』！　コイツを食ってオレのゴリラパワーは真に解放されるのさツ！」

クリス、この上無いドヤ顔。

「よく分からないっすけど、岩崎さんすごオオオオオい」

ドーピングバナナの効果に感心するレベツカに見守られ、最終ラウンドが始まる。



「お、重かった……スうううううう……」

大食堂に帰還したレベツカは、片手に気絶したクリスを。もう片方には、ゴミ袋に包まれて小声でブツブツ呟いてるバリーをつかんでいる。どうやら、ここまで引きずって運んできたようだ。で、大食堂内にて続行中のコアな拷問の方は。

「本当に呆れるわッ！ これだけ責めても口を割らないなんて……頭オカシイんじゃないのッ!？」

ビリビリビリッ、ビリビリビリッ！

「うッ、くッ、ぬおおおおおお　！　まだまだ、私は耐えてみせるぞッ！」

ビリビリビリッ、ビリビリビリッ！

上半身裸になったウエスカーが椅子に固定され、ネバーでギブアップしている。

「ウエスカー隊長！ 両乳首に電極はさんで悶えてる場合じゃないっすよ！」

一応ツツコンではみるが、あまり建設的な協力は求められそうにない。

「ちょ、ちょっと！ どうしたのよ、クリス!？」

首筋からの出血が未だに止まらないクリスに気づいたジルが、慌てて駆け寄ってくる。

「手強いゾンビにやられたっす。そのゾンビは撃退できたっすけど、先輩は爪で首を刺されて……」

自責の念にかられているかのように、レベツカは俯き加減で呟いた。

「了解したわ。この食堂内はとりあえず安全だから、ここで応急処置を施すとしましょう……安心して、あたしのコスメポーチに道具はそろっているから」

ジル、真剣に同僚の心配をするのはいいが、乳首を電流でイジメられてるオッサンが背景にいるのを忘れないで。

「それじゃあ、ジル先輩……後を頼むっス。自分はコレ……じゃなくて、バリー先輩の残骸みたいなのを連れて搜索を続行するっス」  
レベツカ、フレツシュな感じでビシツと敬礼し、踵を返す。

「コロシテクレ、コロシテクレ、コロシテクレ……」  
バリー、大蛇の排泄物と化した上、仲間からあっさり見捨てられたのがカナリの後遺症となったようで、体を丸めてブツブツと呪文を唱えちゃってる。

「さあ、行くっスよ、バリー先輩！ ついに新しいエリアへ踏み込むっス！」

「ヤダヤダヤダヤダヤダヤダッ！ お外は怖いっ！ お化けとか絶対出るって！」

レベツカとバリーのペアは、今までに入手したアイテムを駆使してついに外へ。と言っても、館の領地から出れたワケではなく、広大なスペースの中庭に進めただけ。辺りには不気味なモヤが薄らと漂っていて、遠くの方から獣の遠吠えみたいなのが聞こえてくる。舗装はされていないが、一応、道らしき物が続いている、二人はしっかりと周囲の雑木林を警戒しつつ歩を進めていく。

<ぐわあゝゝ、ぐわあゝゝ、ニンゲンガキタぐわあゝゝ！>

朽ちかけた鉄柵にとまっている数匹のカラスが、急に人語をしゃべりだす。

「ひゃッ！？ カ、カラスが………バリー先輩ッ、今の聞いたっスか！？」

ウイルスに感染した人間の死肉を食べたカラスが変異したものであろうが、普通に人の言葉を発せられて、レベツカは驚きながら仲間の方に向き直る。

「それでは皆さん、サヨウナラ」

そう言っつて、ベレッタの銃口を自分の口に啜えようとしているバ



て逃げ出さないようにするレベルかと、必死にドアを叩いて懇願するオッサン。正直……見るに堪えない。

ヒタヒタヒタ……………

「ひッ!?!」

背後から素足で地面を歩くような音がして、バリーは小さく悲鳴を上げながら振り向いた。そこには……

< あんれまあ、どちら様だっぺか!?! >

「ぎゃあああああああああああああああああッッッ!?!」

カツと両目を見開いて絶叫するバリー。人の形をした“何か”がそこに立っていたのだ。

< ど、どうかしたただか!? あたしやあ、この小屋に住んどるモンだけでも、ちゃんとしたお客様は久しぶりだっぺ。歓迎するぞらよ >  
話し口調は妙に穏やかではあるが、残念なことにその外見は、バリーの心臓を今にも破裂させかねない攻撃力を有していた。

「だ、だだだだだだッ、ダレですかあああああッッ!?!」  
< あたしやあ、『リサ・トレヴァー』っちゅうモンだよ >

『リサ・トレヴァー』 現在の舞台となっているこの洋館を設計した『ジョージ・トレヴァー』の娘が、始祖ウィルスを投与されたなれの果て。30年もの長期に渡ってウィルスの実験を受けており、凄まじい生命力を持つ。既に死んだ母親を求めて館の領地内を彷徨っている。頑丈な手枷をつけられ、ボロ布でつきはぎしたような粗末な服を身に纏い、頭から麻袋のような物を被っている。

「俺、バリー、38歳! 職業は一級フラグ建築士! コワイのヤダ! お家に帰してええええええ (泣)!」

バリーのとっても危険な異文化交流が始まった。もちろん、下半身はビッチョビッチョにして……。





であった頃の感情の欠片が落ちているんだ。生体実験によって生み出されてしまったゾンビ犬や大蛇も然り……企業の利潤追求から生じた犠牲なのだ。

<あたしゃこんなコトしかしてやれんけどなあ、まあ、頑張つてな。寄宿舎にもバケモンは住みついてっからな、気いつけるだあよう>  
戦地に赴く肉親の身を案じるかのようにリサは声をかけ、手枷をされたままの手を差し伸べてきた。

「感謝する、リサ。俺はいつだってくじけそうになるが、君の言葉を聞いて」

バンッ！

勢い良く開いたドア。そして……

ポオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ツツツツ！

間髪入れずに撃ち込まれる一発の火炎弾。

<うっひゃあああああああああッッッ！ 熱ッ、熱ッ、あ  
っっっっっっっっっっっッッッ！>

よく燃えそうな服と頭に被った袋が炎上し、一瞬にしてリサの火だるまが出来上がった。

「バリー先輩、助けに来たっスよ！」

「……おい、またかよ」

洋館内で起きたビックリ心臓麻痺事件が思い出される。

<お母あゝゝ、お父あゝゝ、今そっちに逝くだあよおおおおお  
おゝゝゝゝゝ！！！>

ドサッ……

リサ、悲痛な叫びと共に。

「……おお、神よ。どうして俺の同僚はこんな鬼畜ばかりなのですか？ 試練ですか？ 生命保険の加入を断られ続ける中年に  
対し、あまりに残酷な試練ではありませんか!？」

バリー、床に倒れて炎上するリサを前に天を仰ぐ。

「先輩、どうかしたんスか？」

「ええ、どうかしたんです！」

怪訝な顔になってるレベッカに、バリーは説教臭い物言いです返事する。

「で、コイツは一体……何スか？」

「オマエ等とは違う心清らかな犠牲者だ」

「……………は？」

レベッカ、“何ラリってんだよ、このオッサン？”　みたいな目つきで見つめてる。

「とにかくだッ。必要なアイテムは手に入った。先を急ぐとしよう」  
そう言って小屋を後にするバリーの背中からは、何だかちよっぴり大きくなっていた。

「いイイイイイイ~~~~~やアアアアアア　　！！」

またしても、新宿2丁目の住人みたいな悲鳴を上げながら、バリーは万歳のポーズで逃げまどう。目的地である『寄宿舎』に到着して早々、最初の一室でくわしたのは、巨大なクモ。人間が精巧な着ぐるみに入り、動いてるのではないかと思ってしまう程の大きさで、壁や天井を器用に這いずり回っているのだ。

『ウエブスピナー』　クモをベースにした初期のB・O・W。だが、知能が著しく低いため兵器としての実用性は乏しい。毒液を吐く。

「おッ、アイテムを見つけたッス」

凶暴なクモに追いかけてまわされてるバリーをよそに、レベッカは『白紙の本』というアイテムを発見。

<シャアアアアアアアアアアアアアッ！　シャアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！>

耳障りな鳴き声を上げながら迫ってくる巨大なクモ。バリーはその部屋の階段を駆け上がり、ピリヤード台のある二階へ。

「マズう　　い！　　ザ・行き止まりじゃねえかよッ！」

ビリヤード台を挟んでバリーとクモのバケモンが対峙した。

「先輩ッ、何してるっスか！？　早く銃で応戦するっスよ！」

一階からレベツカが大声で呼びかけてきた。

「ムリムリムリッ！　だってキモイもん！　撃ったら腹からビジュツて、画的に不愉快な体液撒き散らしそうなんだもん！」

「都会の女子高生みたいなコト言ってる場合じゃないっスよ」

「じゃあオマエがこっち来て撃ってくれよッ！　さつき中庭の小屋で使った火炎弾があるだろッ！」

「イヤッスよ。弾は自前なんで無駄撃ちはしたくないっス」

ものすごくさり気ない顔して答えやがった。コイツ……仲間の死活問題より消耗品の費用を優先するらしい。

（ちつくしよオオオオオオオオオオ！　なんでうちのチームにはゴリラやマダオやビツチしかいねんだよッ！？）

コイツ等が特殊部隊のメンバーとして採用された基準って……ナニ？

<お邪魔するでよ~~~~~>

えらくノンキな声がして、開いたドアから入って来たのは

「ふにゃあああああああツツツ！」

レベツカが変な悲鳴を上げて腰を抜かした。そこには、ついさつき火炎弾の直撃でコンガリとローストされたハズのリサの姿が。

<あんれまあ、さつきのお客さん達でねえべか。えらく殺気だっているけど、どうかしたっぺか？>

近所を散歩しててなんとなく寄ってみた……そんな感じで現れて、リサは階段を上ってくる。

「り、リサ！？　生きてたのかッ！？」

<あたしやあ30年もの間、色んな薬注射されてっから、いつの間にもやら不死身になってしまったよ。だから、火傷はできちゃったけど、あれっくらいのは炎は大したことないっすら>

「そ、そうなのか…… スゴいな。で…… 何をしに来たんだ？」

<火傷の薬をもらいに来たべさ>

そう言いながら、リサはバリーと対峙していた巨大なクモにノソノソと歩み寄り

ザシュツ！ ザシュツ！ ブシュウアアアアアアアアアアア

ア ……！！

いきなり目の前で展開される猟奇殺害現場。リサは素手でクモの太くてガツチリとした脚をつかみ、力任せに引っこ抜く。勢いが良いもんだから、その際に飛び散った血や体液がバリーの顔面に降りかかる。

「うっわあああああゝゝ あははははあああああゝゝ」

凄惨な光景を前にして、バリーの恐怖に対する防御力が崩壊 満面の笑顔で白昼夢へ突入。

<このクモの体液がイイ薬になるだべさ。こうやって、直接患部に  
ヌリヌリすっだよ>

テレビに映ったら確実にNGになる民間療法が繰り広げられる。

「そ、それじゃあ…… 失礼するっスゝゝ！」

バリーの襟首を無造作につかみ、引きつった笑顔で慌てて引きずっていくレベツカ。

「さあ、俺のカワイイ娘達イゝゝ 今日も楽しく無理心中だぞオ

ゝゝ

そして、男・38歳のハートはついに全壊し、瓦礫と化し、粉になり……… 風に舞った。

サメはカマボコ material になり、イルカは静岡のスーパーに切り身で並ぶ（前書き）

12月です。子供の頃はクリスマスがとても楽しみだったのに、大人になった現在では殺意すら覚える今日この頃。クリスマスと呼ぶからいけないのです。「天皇誕生日の次の日」・「天皇誕生日の次の日」と2日間を呼称すればよいのです！ そんな回収屋の彼女は、今年もモニターの中から出てきそうにないんで……。

さて、活動報告で発表した通り、ついに挿絵の挿入が不可能となりました。これもみてみんの運営の地道な努力が反映された結果ですWWW。つてなワケで、読者様方には大変な御不便をおかけしますが、回収屋は作品に出来る限りの臨場感を追求致しますので、御世話になっております別の投稿サイトにキャラクターのグラフィックは移転。ただいま、緊急改装中であります。完成でき次第、皆様にサイトの紹介も致しますので、何卒、宜しくお願いしま〜す！

サメはカマボコ material になり、イルカは静岡のスーパーに切り身で並ぶ

「うつわあ〜〜……これはスゴイっスねえ〜〜！」

「よオ〜〜し、今度はパパが鬼だぞオ〜〜 捕まえてやるウ〜〜」

「

面前に広がる光景に愕然としているレベツカと、未だにタミフルつてるバリーの二名。彼等は『001号室のカギ』と『制御室のカギ』を回収し、とある一室で本棚を押して移動させ、地下へと続いている金属製の梯子を発見する。で、慎重に降りて行った先はザ・水びたし。

「何かの事故でも起きたっスかねえ？」

二人は重厚な金属で形造られたドーム型の広大な空間に居た。ただ、何かしらの不具合が発生したのであるう、二人の太もも辺りまで浸水しており、あまり灯りのないこの状態でこのまま突き進むのは考えさせられた。

「ん？ おい、レベツカ……………」

バリーの声が急に正常に戻って呼びかけてきた。

「どうかしたっスか？」

「俺、いきなり脚が痛くなってきたんだが……………」

「それは多分、更年期障害っスね」

「いや、その……………水になんだか赤い色が混じってだな……………」

「神経痛の一種っスよ。老いはコワイっスねえ」

「だから、あの……………さっきから大きな魚みたいなのが……………」

「うるさいっスねえ！ 一体、何が ツ、ふにゃあ

ああああああああああアツツ！？」

ビチビチビチビチッ！！ バシヤバシヤバシヤ！！

バリーの脚に大きな“サメ”が一匹食らいついていた。今にも食

い千切らんとばかりに、ガツチリと。周囲をよく見渡してみれば、大小様々なサメ共が我が物顔で遊泳しているではないか。

「レベツカ……俺、今から気絶し

」

パシヤ

ユラアアアアアア……

最後の言葉もまともに言い終わらない内に、卒倒したバリーは水面に浮かぶゴミのごとく引っ張られていく。

「マズイっスうううう！ このままではバリー先輩がサメのエサになっちまうっスうううう！ ………………つて、まあイイっス」

レベツカ、俯けでゆっくりと水面を漂い遠くの方へ消えていくバリーに 敬礼ッ！

「さて、搜索を続行するっス」

近頃の十代はとつてもゲーム脳。しばらくすればオッサンはコンティニューして生き返る………みたいな予測のもと、とつてもさわやかに見捨てちゃう。

カチャ……

レベツカは『制御室のカギ』を使用して中へ。扉のすぐ隣では警告灯が赤く灯って、非常時であることを示している。

カツカツカツカツ

レベツカはすぐ傍の梯子を使って地下のフロアに降りる。そこは制御室の機関部になっており、コンソールの一部にエラー表示が出ている。

(ふむふむ……どうやら、排水中に事故ったようっスね)

ここで長く思索していても仕様がな。このドームを隅々まで探索するには、どうしても排水しておく必要がある。レベツカは排水を行うスイッチを押した。で、当然のことながら、その行為はフラグであり

ズンッ！！





テイを再解除してください>

無情に告げられる機械音声。

「は、は、は、はうウウウウウウウウウウ　！？」

レベツカの心臓が焦りのあまりにタンゴのステップを踏み出す。

ドンドンドンツッ！　ドンドンドンツッ！

まだ三分の一程見えている強化ガラスを、ダレかが“外側”から叩く音。カッと大きく目を見開いたレベツカが視線をやれば、そこには……

「ガボボボツ！　ウゴボオオオオオオオオ！　（巨大動物に食われるコトに、ちょっぴり耐性がついた自分が怖い）」

腰の辺りまでガブリと呑みこまれ、とてつもなくいびつで気持ち悪い人魚みたいになってるバリーが、口から泡を吹き出しながら何か言ってる。

「……………緊急事態っス！　あんなサメが流れ込んで来たら、とつても面倒臭いコトになる気がするっス！」

レベツカ、仲間の安否に関する光景を完全に無視る。で、フロアの隅々を走り回り、各油圧上昇バルブのスイッチを発見。そこには……『1番』・『2番』・『3番』の三つのスイッチがあった。さあ、どうする？　押すべきスイッチを間違つて、万が一更なる事故につながつては全てが終わってしまう。

（当然のことながら分からないっス……………あ、ここは知ってそんな人に聞いてみるのが一番っスね！）

レベツカは無線機を手にとってコールする。

「ウエスカー隊長、大変なんス！　制御室に閉じ込められて、周り  
は水浸しで危険生物が徘徊してて　」

<ハアハア……ハアハア……ジル、もう許してくれ。ケータイの隠し場所を教える……降参だ……うぐッ>

<ちよつと、話しかけないでよッ。今、クリスの首の傷を縫ってん





がとりえの小娘がッ……キモオタ共に視姦されてるってんだ……  
…ブツブツ」

ジル、レベッカに背中を向けたままで何か小声で呟いてる。

「え？ 何か言ってたっすか？」

「はいはい、何も言っていないわよ。そんじゃあ、サクッと救出してあげましょうかねえ」

「先輩、なんかセリフが棒読みっばいっすけど………って  
！？」

「よっこらせっ………と」

ガシヤ！

ものすごく軽いノリで担がれるロケットランチャー。

「なッ、なななななななななな、何考えてんすか！？ サメと仲  
良く沈める気っすか！？」

「我慢してね。肉を切らせて骨を断つってヤツよ」

ジル、少々嬉しそうにロック・オン。

「肉も骨も粉々になるっすよオオオオオオオオオオ！！」

号泣するレベッカが叫び声を上げた直後

ドシューウウウウウウウウ

発射。

ツツツ！！

「あ

レベッカ、思考停止。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

ツツツ

ン！！

SAKURETU。

「……………任務完了。ヒロインの座は死守され じゃなくて、  
巨大な危険生物の駆除に成功」

ちよつぱり男前な背中を向けて、ジルはその場を立ち去ってしまった。残されたのは水面にプカプカしている肉片と、辛うじて直撃は避けた……レベツカの姿。朽ちた木の板みたいに仰向けで漂っている。

（撃ちやがったっス……………あのアマ、躊躇なくブツぱなしやがったっス……………）

芽生える殺意。で……

「い〜き〜て〜るう

！ 生還だアアアア

ア！ 俺、まだこの世に居てもいいんだあああああああああああああ  
ああツツツ！」

シンクロの選手みたいに水中から飛び出したバリーが、狂喜じみた声を上げた。首にサメの臓物の一部を絡ませて。

「はいはい、良かつたっスね」

レベツカ、全くもって関心無し。

「サメの消化器官の中で、俺はまどろみながら“光”を見た……そう、幸運の女神だッ！ 最悪の状況から最高の手を差し伸べてくれる、幸運の女神が俺にはついてくれてるに違いない。ああ、ありがとう……生きてまた家族に出会える希望がわいてきたッ！」

女神B：「天国来んな」

一瞬、バリーの頭上に、慈愛に満ちた笑顔で彼の頭をゲシゲシと蹴ってる幻覚が見えたが。

二人はその後、排水作業を成功させ、サメの臓物に紛れていた『ギヤラリーのカギ』を回収。梯子を上って地上の寄宿舎まで戻る。

『ギヤラリーのカギ』を使って先へ進み、廊下で朽ち果てていた科学者の遺体から『殺虫スプレー』を入手。迫りくる巨大な八手共を駆除。そして、『003号室のカギ』を手に入れ、『白紙の本』を



グパアアアアア

本体と思われる球状の物体が胎動し、開いた。

「花が咲いたっス……！」

レベツカの形容通り、『威容』の全体像から想像できるのは

超規格外の植物。その名は『プラント42』。T・ウィルスの注射により変異を起こした植物だ。しかも、この雰囲気……以前にもドコかで。

「あ………ジルの時のヤツと似てるな」

紙オムツの交換を終え、ズボンをはき直したバリーがポツリと呟く。当然、このバリーの呟きはまたしても一種のフラグで、健全な男児諸君お待たせしましたってカンジで、要するにだ。

ヒュッ

人間の存在を認識したプラント42が、その太い触手を俊敏に動かして獲物めがけて

獲物Ⅱアンモニア臭がする38歳のヒゲ面オヤジ&清潔感のある18歳の美少女。プラント42はとつても空気が読めて、読者の期待に応えられるイイ子です。だから……

「ふにゃあああああああああああッッッ！ 捕獲されたっスううううううう！」

選択に迷い無し。太い触手がレベツカの胴体にガッチリと絡みつき、彼女の体を軽々と宙づりにしてしまう。

「ッ、い、いかん！ 呆けて見物している場合じゃない！」

そうだ、バリー。オマエのカワイイ後輩が貞操の危機に陥っている。すぐに応戦するんだ。

「ええつと……確か、バックパツクの中に火炎弾の予備が………ん？」

完全防水仕様のため、サメに丸ごと吞まれてはいたが中身は無事。



ただ、バリーは其中に明らかに武器でもアイテムでもない物を発見。

（コレってジルのケータイだよな？）

そう、バリーが気づかない内にウェスカーが放り込んで隠したヤツだ。こ、コレって……つまり。

幸運の女神B：「さあ、撮影を始めるのです　そして、行きましよう……法律の向こう側へ」

幸運の女神、犯罪のほう助までやりだしたよ。



「もう、最低っス！撮ってないで早く助けるっスよ　　ッ！」  
涙目のレベッカが羞恥をこらえる表情で助けを求めてくる。

「スマン……今、俺はこの上無い使命感に苛まれているんだ。そう、これは戦場カメラマンが、戦争の惨状と悲惨さを世界に訴えかけるような感覚。ここで撮るのをやめたら、俺は一生後悔するような気がしてならないんだッ！（キリッ）」

ものすごく男前な面で言い放ったが、やってることは変態の盗撮と同じレベルだ。

シウルシウルシウル……ウニヨウニヨウニヨウ……

細い触手群がエモノをロック・オンし、レベッカの服のわずかな隙間から次々と滑り込んでいく。

「ふにゃあああああ……ん　　は、入ってくるっスううう……マジでヤバイっスううう……！」

胸元をまさぐる触手（細）が、スポーツブラという最期の砦を難なく突破し、内側の柔らかな膨らみにその身を絡ませていく。這いずり、撫で回し、摘み上げる。

「ウエスカー……俺、やっとオマエの信念に気づいたよ。そう、コイツが撮りたかったんだよなッ！　女体が淫らな空気を発すれば、男は黙って撮影に集中。よし、ヘタレ過ぎた俺の汚名返上だッ！」  
盗撮で返上されるのは汚名ではなく名誉の方だ。

女神B：「おおお……　ここにまた一人、異常性欲者が誕生しましたー！」

幸運の女神も大変お喜びのようです。

で、所変わって洋館の大食堂では。

「……………コイツ等、ダレ？」

寄宿舎の地下施設でロケランをブツばなした後、悠々と帰還してきたジルの前には、初めてみるタイプのB・O・W。が三匹……食堂の椅子に腰かけ、テーブルの上でカップ麺食ってやがる。いびつながら人型で、全身が深緑の皮膚をしていて不気味。

『ハンター』 人間をベースに、T・ウィルスを使って爬虫類などの遺伝子を組み込み強化したB・O・W。類人猿レベルだが知能があり、調教次第で十数種類のコマンドを理解し、他の個体との連携も可能。硬質な外皮を持ち、大型肉食獣と同等の筋力と反射速度を誇る。高い耐久力と素早い動作に加え、相手の首を切り落とす即死攻撃も持つ。

「なんかよう……シフトの都合でゾンビと交代しに来たらしいぜ」  
首のケガの応急処置が済み、暖炉の前で座り込んで休養中のクリスが答える。

「シフトって……バイトなの？ 時給制なの？」  
このクリーチャー達によって何故か解放されたウエスカーが、一緒にになってカップ麺食ってるし。で、連中がジルやクリスの事に気づいているのかどうかは知らないが、今のところ、こっちを攻撃してくる様子は無い。と言うより、ヤル気自体が感じられない。さつきから食事しながら雑談ばっかしてる。

ハンター ……ひゃっはあ〜！ OVA版ブラッ ラゲーンのプロ  
レーイがついに手に入ったぜえ〜！ とつと引きこもろ！>  
ハンター ……金持ってんなあ。こっちはガン ムUCを海外サイ  
トからおとして観てるってのによろ>

ハンター ……ぎゃあああああアッ！ DLしたエロゲー立ち  
上げたら、トロイの木馬に感染されちゃったアアアアア！>

ハンター ……うっせえよ。オマエはホリエモンのコトでも心配し  
てる>

ハンター ……そういや最近、キレ痔がひどくて嘆いてるらしいぜ>  
ハンター ……うほッ、マジか！？ ついに刑務所仲間の洗礼によ

りライブド、アツ                   ！   か！？>

ハンター   ：<もうホリエモンじゃなくてホラレモンだな>

ハンター   ：<誰うまあああWWW>

ハンター   ：<そして、全裸のラストグラビアって誰得うううう

WWW>

ハンター   ：<なんてこつた……こつちはただでさえ、宮村 子の妊娠で劇場版のアスカのアフレコに支障が出るんじゃないかって、心配で胸が苦しいってのに。ちくしょうめええええええええ

！！！>

ハンター   ：<いや、そこは別にどうでもいいだろ。普通に祝つとけよ>

ハンター   ：<そういえばさあ、そろそろクリスマスだよな。オマエ等……予定は？>

ハンター   ：<あるワケねえだろ、こんちきしょうオオオオオ！>  
ハンター   ：<今年も一人でオールナイトだぜ、こんちきしょうオオオオオ！>

回収屋   ：<リア充は爆発してる、こんちきしょうオオオオオ！>  
ハンター   ：<……おい、今、なんか知らないヤツ混じつてなかったか？>

と、こんな様子だ。現状、ジル達に危害を加えてくる様子は無い。

「さてと……二人とも、朗報だ」

カップ麺を食い終わったウェスカーが、楊枝でシーハーしながら席を立ち、何だか自慢でもするかのような雰囲気と言う。

「何がだよ？」

「中庭の二画に噴水があつて、そこから地下の研究所へ行けるらしいんだが、そのためには幾つものイベントをこなし、重要なアイテムをそろえないといけない。だが、今回は友好的なハンター諸君の協力により、大幅なショートカットが可能になった！」

「それって、つまり……?」

ジルが小さく首を傾げる。

「カギもアイテムも回収する必要はなくなった上、障害となったであろう強大な敵との戦闘も回避されたという事だッ！　どうだ、素晴らしいハナシだろッ!？」

グラサンをクイツと直しながら得意気に言った。

「いや、待てよ……それって、もしかして」

「うん、そうね。そろそろネタが尽きてきたという、作者の焦りのあらわれに違いないわ」

クリスとジルの両名が、どつか遠くの方を見てる。やめて、見ないで、そこにはダレもいませんよ。

「さあ、出発だ。バリーとレベツカの二人と合流し、地下研究所を目指すぞ！」

最早、仲間の搜索という大義名分は跡形も無い。怪しいヤル気を見ながらせるオールバックのマダオだけが、ただ突っ走るだけだった。

「本来なら、最終ステージまでの道のりはこうなっていました  
ダイジエストバージョンをどうぞ」

クリス、左右から迫って来る壁のトラップに引っかかり、瀕死の重体に陥る。壁にグイグイと挟まれる様子をじっと静観していたウエスカー、ジル、バリー、レベツカのコメント　「＼(^o^)/オワタ」

ウエスカーが洋館内の壊れていたドアノブをその場で修理している。爽やかな汗をかきつつ、修理し終わった達成感に満ちた彼の顔を見て、部下達は　クリス　回復のため、バナナとハーブを調合中。バリー　汚したズボンを洗濯中。レベツカ　金目のアイテムを探索中。ジル　放屁。

『赤い宝石』・『黄色の宝石』を入手し、虎の石像にはめ込む。仕掛けが作動して『MOディスク』が手に入る。年齢的に一番若いレベル力は初めて目にする記録媒体。故に「『もディスク』って何スか？」

ヨーンとの再戦。ヨーン、バリーを発見。「臭ッ！！」の一言で逃走。廊下の片隅に消臭力をそつと設置して。

『バッテリー』と『クランク』を駆使して中庭の小さな滝をせき止める。流れが消えてそこに現れた通路の突き当たりから梯子を使い、地下へ。地下はジメジメとした洞窟になっており、少し行った先でブラヴオーチームの隊長である『エンリコ・マリーニ』と出会う。彼は痛風が悪化して足の痛みに耐えきれず、そこでリタイアしていたらしい。要するに、自己管理が御粗末だったために任務を放棄することとなったロクデナシ。ここでウェスカーが狙撃して暗殺する予定だったが、彼のバックパックから缶ビールを発見したジルがイラッときて発砲。例によって尻を撃たれて再起不能。「ビールが原因だけに発砲事件だな（キリッ）」とか呟くバリーもついでに被弾。

洞窟の一画で超規格外の巨大クモに襲われる。対巨大生物用兵器・バリーがまたしても無情に投入され、泣きじゃくるオヤジ・38歳が餌食に。そのスキを見て他のメンバーは先へ進む。バリー、民主主義と多数決は“数の暴力”であると悟る。

しばらく家を留守にしたら、知らない人達に住みつかれました（後書き）

次回、最終話



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7298x/>

---

たった今、現代医学が敗北しました

2011年12月5日09時47分発行